

502

56



始



トエ/N-16

502-56



違敬言罪即決例詳解

警視廳警視
法學士 田邊保皓著

日本警察新聞社發行

全
大正
11. 1. 9
内交

自序

余輩ガ過去三年間ノ警察生活ニ於テ實際問題ニ逢著シ、幾多法律ノ解釋適用ニ苦心シタル中ニモ最モ困難ヲ感シタルハ違警罪即決處分ニ關シテナリ。違警罪即決例ハ明治十八年ノ制定ニ係リ、法文簡畧ナルノミナラズ不明ノ點亦尠カラズ、解釋上動モスレバ疑義ヲ生シ易ク其ノ適用ニ當リテ惑フ場合頗ル多シ。加之他ノ法令トノ關係ニ於テモ實際ノ取扱ハ大ニ研究ヲ要ス。是ニ於テ聊カ研究シタ

ル所ヲ述ベ主トシテ其ノ局ニ當ル警察官諸士及今後之ヲ研究セムトスル人士ノ參考ニ供セムトシテ本書ヲ著ハシタリ。幾分ニテモ其ノ目的ヲ達スルヲ得バ著者ノ欣幸之ニ過ギズ。

大正十年八月

赤坂表町警察署ニ於テ

著者誌

凡例

一 本書ノ目的ハ主トシテ實務家ノ參考ニ供セムトスルニ在ルガ故ニ努メテ通説ニ從ヒ、且司法當局ノ見解ニ依リタリ但シ一二之ニ反スル所ナキニアラズ。

一 本書ニ於テハ違警罪即決例ノ解釋ニ止ラズ、即決處分ニ附隨スル問題即チ之ガ執行等ニ關スル説明ヲモ試ミタリ。

一 本書用フル所ノ略號ハ左ノ如シ(但シ數字ハ簡條ヲ示ス)

- (1) 即 違警罪即決例
- (2) 憲 憲法
- (3) 刑訴 刑事訴訟法
- (4) 裁構 裁判所構成法

凡例

(三)

凡例

- (5) 刑 刑法
- (6) 舊刑 舊刑法
- (7) 刑施 刑法施行法

一 本書ヲ著ハスニ就テ左ノ諸氏ノ論文著書等ヲ參考トシタリ。
 茲ニ謹ンデ謝意ヲ表ス。

- (1) 谷野格氏論文

違警罪即決例ヲ論ズ 明治三十三年十月十三日發行

- (2) 泉二新熊氏論文

違警罪即決例改正論 大正七年三月十五日發行 警察協會雜誌第五號以下所載

- (3) 東京修法學史(匿名)

違警罪即決處分ニ關スル疑問 大正八年一月八日發行

- (4) 原高橋德友 兩氏著

警察犯處罰令 釋義 大正九年五月二十日發行

- (5) 板倉松太郎氏著

刑事訴訟法玄義 大正七年四月三十日發行

- (6) 高橋治俊 淺野芳雄 鈴木雄次郎 三氏編纂

刑事先例彙纂 明治四十三年五月廿日發行

- (7) 大審院著作

大審院刑事判例要旨類集 大正九年八月二日發行

- (8) 警視廳訓令

即決處分手續 大正七年六月調令

- (9) 朝鮮總督府訓令

犯罪即決例施行手續 明治四十三年十二月二十號

一 本書ハ主トシテ暑中休暇ヲ利用シテ筆ヲ執リタルガ故ニ短時日ノ間ニ稿ヲ脱シタリ。故ニ誤レル者及足ラザル所ハ他日之ヲ訂正増補ス可シ。

凡例

違警罪即決例詳解目次

緒論	一
第一編 總論	五
第一章 違警罪即決例ノ形式及實質	五
第二章 違警罪即決例ノ沿革及實際的根據	六
第三章 違警罪即決例ノ法的根據	三
第四章 違警罪即決例ノ效力	一六
第一節 人ニ關スル效力	一六
第二節 土地ニ關スル效力	一七

第三節 時ニ關スル效力……………一八

第二編 本論……………一九

第一章 即決權者……………一九

第二章 即決權者ノ管轄……………二二

第一節 總說……………二二

第二節 事物ノ管轄……………二二

第三節 土地ノ管轄……………二五

第三章 即決手續……………二七

第一節 總說……………二七

第二節 審理ノ方法……………二七

第三節 即決言渡ノ形式……………三三

第四章 即決處分ノ性質……………四一

第五章 即決處分ニ對スル救濟……………四四

第一節 總說……………四四

第二節 正式裁判及違警罪裁判所ノ意義……………四五

第三節 正式裁判申立ノ意義及方式……………四六

第四節 正式裁判申立權利者……………五一

第五節 正式裁判申立期間……………五三

第六節 正式裁判申立ノ效力……………五六

第七節 正式裁判手續……………六六

第六章 即決處分ニ對スル執行保全ノ方法六六

第一節 總說……………六八

第二節 科料ノ言渡ヲ爲シタル場合……………七一

第三節 拘留ノ言渡ヲ爲シタル場合……………七七

第三編 餘論……………八三

第一章 即決處分ノ執行……………八三

第一節 總說……………八三

第二節 刑ノ執行ノ指揮……………八三

第三節 刑ノ執行……………八五

第一款 拘留ノ執行……………八五

第二款 科料ノ徵收及勞役場留置ノ執行……………八六

第三款 執行ノ囑託……………八八

第四節 假出場手續……………八九

第五節 拘留ノ執行停止手續……………九〇

第二章 書類下附ノ費用……………九一

附 錄……………九三

違警罪即決例……………九三

書式……………九七

違警罪即決例詳解

法學士 田邊 保皓 著

緒論

一方ヨリハ警察權執行ノ利劍ト稱セラレ、他方ヨリハ人權蹂躪ノ凶器ト叫バル、違警罪即決例トハ如何ナルモノゾ。一千七百八十九年佛國ノ人權宣言ニ於テハ「人ノ權利自由ノ保障ト權力ノ分立トノ無キ國ハ憲法ヲ有セサル國ナリ」ト規定シタリ。茲ニ所謂權利自由ノ保障トハ「ルーツー」ノ所謂天賦ノ自由民權ノ保障ヲ指シ、權力ノ分立トハ「モンテスキュー」ノ唱ヘタル三權分立論ニ則リタル主權作用ノ分立ヲ言フ。而シテ今日憲法ナル語ハ廣狹種々

緒論

(一)

(二)

ノ意義ニ用ヒラル、ト雖モ、普通ニ用ヒラル、所ハ、所謂三權分立論ノ精神ニ則リ且立法權ノ行使ニ付テハ民選議員ヨリ成ル議會ヲシテ之ニ參與セシムルコトヲ原則トシタル政體法ヲ謂ヒ、如斯憲法ヲ有スル國ヲ立憲國又ハ憲法國ト謂ヒ、更ニ如斯政體ヲ立憲政體トイフ。而シテ三權分立論トハ國家ノ一要素タル主權ノ作用ヲ立法、司法、行政ノ三權ニ分チ此ノ三ノ作用ハ之ヲ別個ノ人ヲ以テ成立スル別個獨立對等ナル機關ヲシテ行使セシムトスル論ナリ。立憲政體ハ近世實際上ハ英國ニ於テ發達シ、學說トシテハ佛國ニ於テ完成セラレ、各國ニ於テ多ク採用スル所ノ政體トス。我國ニ於テモ明治二十二年二月十一日帝國憲法ヲ發布セラレ、明ラカニ立憲政體ヲ採用セラレ、明治二十三年第一回帝國議會召集ノ時（明治二三、一一、二五、）ヨリ效力ヲ發生シタリ。

帝國憲法第五十七條ニ於テハ「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」ト規定シ、司法權行使ノ任ニ當ル機關ハ裁判所ナルコトヲ明ラカニシ、且裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ定ム可キモノト規定シタリ。尙第二十四條ニ於テハ「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハル、コトナシ」ト規定シ、第五十八條ニハ「裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス」ト爲シタリ。之等ノ規定ニ基キテ裁判所構成法（明治二三、二、一〇、）刑事訴訟法（明治二三、一〇、）刑事略式手續法（大正三、四、九、）等（法律第六號）ノ諸法律制定セラレ、司法權執行ノ機關及其ノ手續ヲ定メタリ。然ルニ違警罪即決例ニ於テハ司法官ニアラサル行政官タル警察署長、分署長及其ノ代理タル官吏ガ司法權行使ノ衝ニ當リ、裁判ノ正式ヲ用ヒズ、恰モ憲法ノ大原則ニ違反スルガ如シ。是ヲ以テ第

(三)

(四)

二十五帝國議會以來第二十八帝國議會ニ至ル迄前後三回ニ涉リテ之ガ廢止ノ法律案提出セラレタルコトアリ。而カモ違警罪即決例ハ幾多有力ナル反對說アルニ拘ラズ、憲法第七十六條ニ所謂憲法ニ矛盾セサル法令トシテ今日尙遵由ノ效力ヲ有ストセラレ。

第一編 總論

第一章 違警罪即決例ノ形式及實質

違警罪即決例ハ明治十八年九月二十四日太政官布告第三十一號ヲ以テ公布セラレ。故ニ憲法發布以前ノ法律トス。違警罪即決例ハ手續法ニシテ實體法ニアラズ。又民事手續法ニアラズシテ刑事手續法ニ屬ス。即チ國家刑罰權ノ具體的行使ニ關スル手續ヲ規定シタル法規ノ一種トス。而シテ本例ハ制定ノ當初ハ明治十三年七月布告第三十七號ヲ以テ公布セラレタル治罪法ニ對スル特別例外規定タリシガ、憲法發布後裁判所構成法及刑事訴訟法ノ制定アリ、刑事訴訟法實施ノ日(明治二三、一)ヨリ治罪法廢止セラレタルヲ以テ以後

(五)

ハ本例ハ刑事訴訟法ニ對スル例外規定タル地位ニ在リ。

第一章 違警罪即決例ノ沿革及實際的根據

我違警罪即決例ハ獨逸ノ法制ヲ範ト爲シタルヲ以テ其ノ沿革及存在ノ根據ハ彼我共通トス。

獨逸ニ於テ刑事犯ト警察犯トノ區別ノ論議セラレタル當時刑事裁判權警察ト裁判權トノ併立ヲ唱道シタリシガ、學說上刑事犯タルト警察犯タルトヲ問ハズ刑罰ハ總テ獨立ノ裁判所ニ於テノミ科スベキモノナリトノ原則ヲ確認シタル結果、獨逸各聯邦ニ於テハ警察裁判權ノ制度ヲ廢スルニ至レリ。例ヘバ普魯西ハ「一千八百四十二年一月三日ノ布令」ニ依リ之ヲ全廢シ、又一千八百四十九年三月二十八日フランクフルトニ開カレタル國民議會ノ議定シタル帝

國憲法第百八十二條ニハ「行政官廳ノ刑事裁判權ハ之ヲ廢止ス權利ノ侵害ニ關スル裁判ハ裁判所之ヲ爲ス警察官廳ハ刑事裁判ヲ爲スノ權ナシ」トノ規定ヲ設ケ、其後獨逸諸邦ノ法律又之ヲ認メタリ。然ルニ此ノ原則ノ採用ハ實際上ノ問題トシテハ裁判所ノ事務ノ繁雜ト警察權運用ノ效果ノ減少トヲ來シタルヲ以テ其ノ適用ヲ融和シ輕微ナル法令違反ニ就テハ特ニ例外ヲ認メ警察官廳ニ對シ限定セル事件ニ就テノ實質上ノ裁判權ヲ附與スルニ至リ、普魯西ニ於テハ「一千八百五十二年五月十四日ノ法律」ニ於テ、又ば一でん國ニ於テハ「一千八百六十四年五月二十八日」警察事件ノ裁判權ニ就テノ法律」ニ於テ之ヲ認ムルニ至リ、獨逸刑事訴訟法モ亦此制度ヲ認ムルニ至レリ(獨逸刑訴四五三乃至四五八)。茲ニ於テ警察裁判權ハ復活シテ刑事裁判權ト相對峙スルニ至レリ(註)。

(註) 警察裁判權ト刑事裁判權トノ併立ヲ認ムルニ及ビ刑事犯ト警察犯トノ對立ヲ認メ、從テ警察刑法ハ一般刑法ノ範圍ヲ脱シテ獨逸各聯邦ハ警察刑法典ヲ編成シ、一方ニハ在來ノ一般警察ノ命令及禁令ヲ集輯スルト共ニ、他方ニ於テハ警察官廳警察命令ヲ發シ得ベキ目的物ニツキ一般條件ヲ定メ、且之ニ違警罪ノ刑ヲ確定セリ。我國ニ於テモ舊刑法ニ於テ違警罪ヲ定メタリシガ現行刑法ニ於テハ之ヲ削除シテ行政官廳ニ委任シ、內務省令ヲ以テ警察犯處罰令(明治四一、九、二九)ヲ定メ、刑法施行ノ日(同年一〇、二)ヨリ之ヲ實施シタリ。警察犯處罰令ニ定ムル所必ズシモ實質上ノ警察犯ニ限ラズ實質上刑事犯ニ屬スト認ムベキモノモ輕微ナルモノニ限り之ヲ包含セシメタリ。

違警罪即決例ハ警察裁判權ノ思想ヲ基礎トシタル法制ニシテ司法權ハ裁判所之ヲ行フトノ原則ニ反スルモノナリノ非難ヲ蒙ルニモ拘ラズ、今日尙其ノ存立ノ最大理由トスル所ハ前ニ一言セルガ如ク實際上ノ必要ト便宜トニアリ。

(一) 裁判所ノ事務ノ輕減

社會ノ狀態復雜ヲ加フルニ伴ヒ犯罪亦從テ増加ス。大小輕重ヲ問ハズ總テ之ヲ裁判所ニ於テ審理判決スベキモノトセバ其ノ事務劇増ス。特ニ統計上今日我國ノ拘留科料ノミニ處ス可キ事件ハ刑事事件ノ過半ヲ占メ通常裁判所ニ於ケル事件三四十萬件ニ對シ違警罪事件四五十萬件ニ達スルガ如キ狀況ニアルガ如シ。今日ノ裁判所ノ數ヲ以テハ到底全部ヲ敏活ニ處理スルヲ得ズ、從ツテ事務澁滯ヲ免レズ。故ニ輕微ナル犯罪ニ就テハ先ツ警察官廳ノ即決ニ依ラシメ、只正式裁判申立ノ場合ニノミ裁判所ニ於テ審理スルコ

ト、セバ其ノ事務ノ輕減ヲ來スコト大ナリ。

(二) 國費ノ節約

拘留又ハ科料ニ當ル犯罪ヲモ總テ裁判所ヲシテ審判セシムルモノトセバ事務増加シ從ツテ裁判所及判事、檢事其ノ他ノ職員ノ數ヲ増加スルヲ要ス。是レ國家豫算ノ莫大ナル増加ヲ來スニ至ル可シ。

(三) 警察權ノ執行ヲ確保ス

警察ハ社會公共ノ安寧秩序ヲ保持センガ爲ニ臣民ノ自由ヲ制限シ又ハ之ヲ強制スル主權本來ノ作用ナルガ故ニ常ニ警察權執行ノ手段トシテ警察法令ノ違反者ニ對シテハ刑罰ヲ規定ス。此ノ刑罰ヲ實際ニ科スルニ當リ一々裁判所ノ審判ニ委スル時ハ、違反ト判決トノ間ニ多數ノ日子ヲ要シ、或ハ證據湮滅等ノ爲メニ刑罰ヲ免

ル、等ノコトアリ。遂ニ警察權ハ其ノ強制ノ一手段ヲ失ヒ、執行ニ大ナル障害ヲ來スニ至ル。故ニ警察官廳ニ與フルニ一種ノ裁判權ヲ以テスレバ違反ニ對シテ直ニ制裁ヲ加フルコトヲ得ルノミナラズ如此制度ハ違反者ノ意思ヲ壓迫シテ違反ナキニ至ラシムル效果大ナリトス。

(四) 被告人ノ利益

裁判所ノ審理判決ハ細密鄭重ナルガ故ニ常ニ多クノ日子ヲ要ス。輕微ナル事件ニツキ長ク刑ノ確定セザル状態ニ在ルハ被告人ノ不便トスル所少カラズ。又裁判所ノ數ハ少クシテ其ノ管轄區域大ナルガ故ニ(警察官署ニ比シ)出頭ニ要スル時間、費用及其ノ他ノ負擔モ亦從ツテ多大ナル可ク、寧ロ警察官廳ノ即決ニヨリテ刑ノ決定ヲ速カナラシムルコト却ツテ被告人ノ意思ニ合致スル場合多

カル可ク、是レ實際即決處分ニ對スル正式裁判申立ノ數統計上極メテ少キヲ見テモ知ルヲ得可シ。

第三章 違警罪即決例ノ法的根據

違警罪即決例ハ刑事訴訟法ニ對スル例外的特別規定ナルハ前述シタリ。此ノ特別法制ガ憲法實施後ノ今日尙有效トシテ存在スル法的根據如何。

裁判所構成法施行條例第九條ニ於テハ「明治十八年第三十一號布告違警罪即決例ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受ケタルコトナシ」ト規定シ、又刑事訴訟法第四十九條第二項ニ於テハ「司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其ノ書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ」ト爲シ、同第五十三條

第二項ニ於テハ「告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其ノ處分ヲ爲ス可シ」ト定メ同第五十八條第二項ニ於テハ「司法警察官及巡查、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ、其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ官署ニ引致スルコトヲ得ル旨ヲ規定ス。而シテ裁判所構成法施行條例ハ明治二十三年三月十九日法律第二十二號ヲ以テ公布セラレ、又刑事訴訟法ハ明治二十三年十月七日法律第九十六號ヲ以テ公布セラレ、同年十一月一日ヨリ施行セラレ何レモ憲法發布後ノ法律トス（勿論憲法有效ノ期以前ニ屬スレドモ）。故ニ違警罪即決例ヲ以テ憲法違反ニアラザル法律トシテ其ノ有效ヲ保障シタルガ如シ（明治二三、一〇、一四、前橋始審裁判所檢事實疑及同）」。然リト雖モ帝國憲法ニ於テ

ハ「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハル、コトナシ」(憲二四)、「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ、裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」(憲五七)、「裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス」(憲五八第一項)、「特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム」(憲六〇)ト規定シ、之等ノ規定ニ基キテ裁判所構成法及刑事訴訟法規定セラレ、通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス(裁構二)。
 故ニ我國法上ハ三權分立論ニ則リ司法權ハ裁判所之ヲ行フ可ク、刑罰ハ通常裁判所ニ於テ科セラル、大原則ヲ確認シ、只前記ノ憲法第六十條及裁判所構成法第二條但書(但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラズ)ノ除外規定アルノミ。而シテ警察官署ヲ以テ特別裁判所ト明定シタル

法律無ク、又特別裁判所ト解スル餘地無キヲ以テ拘留料料ニ該ル罪ニ付警察官署ニ於テ之ヲ即決シテ刑ノ言渡ヲ爲スハ憲法違反ニアラザルカ。若シ然リトセバ、前述ノ裁判所構成法及刑事訴訟法ノ規定ハ違憲ノ規定トシテ何等效力無ク、之ヲ以テ違警罪即決例有效ノ法的根據ト爲スコト能ハズ、故ニ違憲ナリヤ否ヤハ違警罪即決例自體ニ就テ考究セザル可カラズ。

違警罪即決例ニ依ル即決處分ハ後述スルガ如ク事前手續ニシテ終局的處分ニアラズ。正式裁判申立ノ途ヲ開キ、此ノ救濟方法ヲ使用スレバ被告人ハ常ニ通常裁判所ノ裁判ヲ受クルコトヲ得ルガ故ニ「法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權」ヲ奪フニアラズ。從ツテ憲法違反ニアラズ、從ツテ憲法第七十六號ノ規定ニ依リ今日尙遵由ノ效力ヲ有スト解セラル。

第四章 違警罪即決例ノ效力

第一節 人ニ關スル效力

違警罪即決例ハ内外人ヲ問ハズ總テノ人ニ適用セララルヲ原則トス。但シ國法上及國際法上刑事訴訟法ノ適用ヲ受ケザル者ハ同ジク例外トス。

國法上ノ例外

- (1) 天皇 (憲三)
- (2) 攝政 (攝政令四)
- (3) 帝國議會ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關スル罪ヲ除ク外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セラル、コトナシ(憲五三)。

- (4) 皇族ハ勅許ヲ得ルニ非レバ拘引シ又ハ裁判所ニ召喚スルコトヲ得ス (皇室典範五一)。

二 國際法上ノ例外、所謂治外法權者

- (1) 外國ノ君主、大統領
- (2) 外國ノ外交使臣(大使、公使、辦理公使、特命全權公使、代理大使、代理公使、大使館又ハ公使館參事官、書記官、武官及外交官補等)
- (3) (1)及(2)ニ屬スル者ノ從者
- (4) 外國ノ軍隊及軍艦

第二節 土地ニ關スル效力

違警罪即決例ハ日本内地 (樺太ヲ含ム) ニ施行セララル。即チ我法權ノ及ブ範圍中臺灣、朝鮮及關東州ヲ除ク地域ニ行ハル。臺灣、朝鮮及關東州ニ於テハ各本例ヲ範トシ而カモ之ト内容ヲ異ニスル命令行ハル(註)。

(註)

- 一 臺灣 犯罪即決例 (明治三七、三、一二、律令第四四號。明治四二、六、律令第四號及大正九、八、同第一九號ニ依リ改正)
- 一朝 鮮 犯罪即決例 (明治四三、一、二、一、三、制令第一〇號。明治四五、三、制令第一二號ニ依リ改正)
- 一 關東州 犯罪即決例 (大正八、六、五、勅令第二七四號。大正一〇、六、二、勅令第二四七號ニ依リ改正)

(2) 拘留科料處分規則 (明治四二、四、二七、關東都督府令第二五號。大正八、六、關東廳令第二五號ニ依リ改正)

第三節 時ニ關スル效力

違警罪即決例ハ一般訴訟法ノ原則ニ從ヒ、其ノ實施後廢止ニ至ル迄適用セラル。犯罪時ノ如何ヲ問ハズ、又即決手續開始ノ時期如何ニ關セズ。

第二編 本論

第一章 即決權者

違警罪即決例第一條ニ規定シテ曰ク「警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ」ト。故ニ即決ノ權限ヲ有スル者四種ナリ。即チ(一)警察署長、(二)警察分署長、(三)警察署長ノ代理タル官吏、及(四)警察分署長ノ代理タル官吏トス。代理官ハ官制其ノ他ノ規定上通常警部又ハ警部補タル可シト雖モ敢テ之等ニ限ラズ。巡查ニテモ可ナリト解ス。警部補ヲ分署長ト爲ス警察分署ニ在リテハ巡查部長タル巡查ハ常ニ分署長ノ代理官タルヲ得可シ。巡查部長タラザル巡查ニ在リテハ疑

義アリト雖モ特ニ法律上又ハ事實上委任ノ事實アラバ敢テ妨グル所ニ在ラズト解ス(明治二三、一、二、五、大分縣知事請訓)及同年、同月、二、三、司法大臣訓令。

違警罪即決ハ後述スルガ如ク其ノ形式上行政處分ニシテ裁判ニアラザレドモ、實質ハ司法處分即チ一種ノ裁判タル實質ヲ具フ。故ニ實質的ニ謂ヘバ即決權ヲ有スル者ハ即チ判事ニ該當シ、違警罪ノ即決裁判所ト見ルヲ得可シ。故ニ此ノ一種ノ裁判所ニハ判事ニ該當ス可キ即決官一人アリテ原告官タル檢事ニ相當スル者無シ。告發ヲ爲ス巡查ハ單ニ犯罪事實ヲ告知スルニ過ギズ。故ニ被告人ノミアリテ彈劾者無ク、裁判ノ原則タル原被兩造ノ存在無ク、從ツテ争訟ナシ、原告無ク争訟無クシテ決定ヲ爲スニ至ル。又便宜ヲ唯一ノ根據ト爲ス即決處分ニ就テハ免レザル所ナル可シ。即決權者ハ違警罪ヲ即決スルコトヲ得ルニ止ラズ即決ス可キ義

務ヲ負フ。故ニ事件ヲ即決スルコトナク直ニ管轄裁判所ニ送致スルコト能ハズ(即一、刑訴五八第二項)。又告訴ノ有無モ問フ所ニアラズ、即決權者自ラ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ即決處分ヲ爲スコトヲ得。故ニ拘留料料ニ當ル罪ニ就テハ先ヅ警察官署之ヲ即決シ、區裁判所ハ正式裁判ニ限り裁判スルモノトス(明治二三、一〇、一四、前橋始審裁判所檢事實疑及同年、同月、二二、司法省刑甲第二〇九二、刑甲第二四九二、號刑事局長回答。明治二三、一一、一、電報高知地方裁判所檢事正問合及同年、同月、一號刑事局長回答)。

違警罪ヲ即決ス可キ義務ヲ負フトハ必ズシモ拘留又ハ科料ノ言渡ヲ爲ス可シトノ謂ニアラズ、犯罪ノ種類、動機、證據等ヲ參酌シテ科刑スルト否トヲ定ム可ク、是レ法ノ運用ニ屬ス。

第二章 即決權者ノ管轄

第一節 總 說

即決權者ノ管轄トハ即決權者ガ其ノ權限ヲ行使シ得ル範圍ヲ謂ヒ、事物ノ管轄及土地ノ管轄ニ別チテ説明セラル。事物ノ管轄ハ拘留科料ニ該ル罪ノ公訴ニシテ、土地ノ管轄ハ警察署又ハ警察分署ノ管轄地域内ニ於ケル犯罪トス。

第二節 事物ノ管轄

一 拘留又ハ科料ニ該ル罪 (違警罪)

即決ヲ爲シ得ル犯罪ハ拘留又ハ科料ニ該ル罪即チ舊刑法ノ所謂違警罪トス。

舊刑法ハ法律ニ於テ罰ス可キ罪ヲ重罪、輕罪及違警罪ノ三種ト

爲シ (舊刑一)、拘留、科料ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲シタリ (舊刑九)。然レドモ現行刑法ノ實施ト共ニ違警罪ナル名稱ヲ廢シ、拘留又ハ科料ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ違警罪ト看做ス (刑施三一) ト爲シタルヲ以テ違警罪即決例ニ所謂違警罪トハ今日ニ於テハ拘留又ハ科料ニ該ル罪ニシテ其ノ刑事犯タルト警察犯タルトヲ問ハズ、又法律ニ依リテ規定セラレタルト命令ニ依リテ規定セラレタルトヲ問ハス (明治二六、五、一二、乾警第八七號島根縣知事何及同年、同月、三一、民刑甲第一二七號司法大臣訓令)。
即決ヲ爲シ得ル犯罪ハ現行犯タルト非現行犯タルトヲ問ハズ、刑事訴訟法第五十八條第二項ハ只現行犯ノ特別手續ヲ規定シタルニ過ギズ (明治二四、三、二四、第七六八號廣島控訴院檢事長訓令及同年、四、六、刑甲第一四七號司法大臣訓令)。
二 拘留又ハ科料ニ該ル罪ノ公訴

違警罪即決例第一條但書ニ於テ私訴ヲ除外シタルヲ以テ即決權

(四二)

者ノ事物管轄ハ公訴ニ限ルト解ス。

公訴ヲ以テ刑事裁判所ニ對スル檢事ノ訴權ヲ意味シ、私訴ヲ以テ私人ノ提起スル刑事訴訟ト解スル時ハ本條ノ定ムル所意味ヲ爲サズ。蓋シ違警罪即決處分ニ於テハ檢事ノ起訴ヲ要セザルヲ以テナリ。且我刑事訴訟法ニ於テハ私人提起ノ刑事訴訟ヲ認メズ。故ニ本條ニ所謂私訴ハ刑事訴訟法第二條ノ所謂私訴ヲ意味シ「犯罪ニ因リ生ジタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスルモノ」ト解シ、此ノ私訴ニ對スル刑事ノ訴訟即チ公訴ヲ以テ即決權者ノ事物管轄ト解ス。

私訴ヲ除外シタルハ本例存在ノ實際的根據ヨリ推測シ得可ク、且私訴ハ本來民事訴訟ニ屬スルモノナルヲ以テ便宜處分タル即決ニ依リ裁判官タラザル警察官ノ決定ニ委スルヲ不條理ト爲シタルニ依ル。

私訴ハ之ヲ即決官ノ管轄外ニ置キタルニ止ルガ故ニ正式裁判申立アリテ事件ガ裁判所ニ繫屬シタル時ハ公訴ニ附帶シテ私訴ノ提起ヲ爲スコトヲ得。

即決權者ノ事物管轄ハ拘留又ハ科料ニ該ル罪ノ公訴ニ限レルハ即決ガ本來便宜處分ナルガ故ニ輕微ナル犯罪ニ限り罰金以上ノ刑ニ該ル可キ重大ナル犯罪ニ付テハ之ヲ認ム可キモノニアラザルニ依ル。

第三節 土地ノ管轄

土地ノ管轄ハ土地ノ區域ニ依ル權限行使ノ範圍ニシテ、警察署又ハ警察分署ノ管轄地域内ノ犯罪ニ限ル。故ニ犯罪ノ構成要件タル事實ノ發生地即チ行爲地、中間現象地、結果地及不作爲犯ニ付テハ不作爲ノ地又ハ義務タル作爲ヲ爲ス可カリシ地ヲ管轄スル即

(五二)

決權者ハ其ノ犯罪ニ付即決ノ權限ヲ有ス。而シテ其ノ管轄地域内ノ犯罪ニ付テハ犯人ノ住居スルト否トハ問フ所ニアラズ。然レドモ甲署管内ニ於テ犯シタル犯罪ニ付犯人乙署管内ニ其ノ住所ヲ有スルノ故ヲ以テ其ノ即決處分ヲ乙署ニ囑託スルコトヲ得ズ(明治二五、保第一六號大分縣知事照會及同年、三、八、民刑甲第五二號司法次官回答)。

我刑事訴訟法ニ於テ認メタル裁判所ノ土地ノ管轄ニ付テハ原則トシテ犯罪地又ハ被告人所在地ノ裁判所ヲ以テ豫審及公判ノ管轄ナリト定メタルニ(刑訴二六)比シ、即決權者ノ土地管轄ハ狹隘ナリトス。此ノ點ニ於テ非難ヲ免レズ。即決權者ノ土地管轄ヲ以テ普通裁判所ノ土地管轄ト異ナラシムル何等ノ根據ナク、又正式裁判申立ニ際シ通常裁判所ノ土地管轄ハ前述ノ如ク犯罪地及被告人ノ所在地ノ二者何レニ依ルモ可ナルヲ以テ、或ハ犯罪地ノ區裁判所事件ヲ管轄ス可ク、或ハ又被告人所在地ノ區裁判所之ヲ管轄スルニ至ル可シ。故ニ寧ロ刑事訴訟法ト同一ニ犯罪地及被告人ノ所在地ニ依ラシムルニ如カズ。

第三章 即決手續

第一節 總說

國家刑罰權ノ具體的行使ニ當リテハ必ズ之ガ手續ヲ經ルヲ要ス。即チ犯罪ニ對シテ刑ヲ科スルニハ一定ノ手續ニ從ヒテ之ガ審理判決ヲ爲スヲ要ス。通常刑事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス。然ルニ違警罪即決例ハ便宜ヲ唯一存在ノ根據ト爲ス法制ナルガ故ニ詳細ナル審判ノ方法ヲ規定セズ。

第二節 審理ノ方法

即決例第二條ニ曰ク「即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒズ被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ取調べ直チニ其言渡ヲ爲スベシ、又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得」ト。之ニ依リテ見レバ審理ノ方法ニハ二種アルヲ知ル。即チ對席ノ場合ト缺席ノ場合トス。何レノ場合ニ於テモ裁判ノ正式ヲ用ヒズ、即チ刑事訴訟法ニ規定スル所ノ原告官タル檢事ノ起訴、原被兩造ノ對立、公判審理等ノ手續ハ一切之ヲ用ヒザルハ明ラカナリトス。故ニ即決權者ハ檢事ノ移牒、司法警察官及巡查、憲兵卒ノ告發、私人ノ告訴又ハ自ラ犯罪アリタルコトヲ認知シタルトキハ即決ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス(註一)、(註二)、(註三)。

(註一) 拘留又ハ科料ニ該ル罪ニツキ警察官以外ノ官吏、公吏ガ

告發スルニハ刑事訴訟法第五十二條ニ依リ其ノ職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發シ、其ノ告發ヲ受ケタル檢事ハ同法第六十三條、同第六十四條及同第六十二條ニ依リ取扱フ可キモノトス(明治二三、一一、二五、檢庶部六四六號天津地方裁判所檢事正問合及同年同月、一九、刑甲第二九三號刑事局長回答。明治二四、一一、三、警視往第一號三重縣知事問合及同年同月、二〇、刑甲第一七號刑)。但シ告發ヲ爲サズシテ單ニ警察官署ニ通知スルハ之ヲ爲シ得可ク、又如此場合ハ即決權者ハ其ノ犯罪ヲ知ル理由ノ如何ヲ問ハザルモノナルガ故ニ之ガ即決ヲ爲シ得。

(註二) 刑事訴訟法第五十八條第二項ニ於テハ司法警察官及巡查憲兵卒違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ即決ヲ爲ス官署ニ告發ス可ク其ノ氏名、住所分明ナラズ又ハ逃亡ノ恐アル者ハ官署ニ引致スルコトヲ得ル旨ヲ規定ス。

(註三) 巡查ノ告發書ニ付テハ何等法定ノ形式ナシト雖モ告發書タル可キ内容ヲ具備ス可キハ當然トス。實際即決權者ノ困難ヲ感ズル所ハ巡查ノ告發書ガ不完全不明瞭ニシテ例ヘバ犯人ノ住所、姓名、犯罪日時ノ記載明確ナラズ、又只單ニ犯行アリタルコトヲ抽象的ニ舉クルノミニシテ犯罪ヲ的確ニ證明ス可キ何等證據タル可キ事實材料ヲ記載セズ、甚ダシキニ至リテハ警察犯處罰令其ノ他ノ取締規則ノ條文ヲ轉載スルニ過ギザルモノアリ。正式裁判申立ノ場合ニ證據不充分ニ依リ無罪ノ判決ヲ受クルコト多シ(附録書式第一號參照)。

(一) 對席ノ場合ニ於ケル審理ノ方法ハ(一)被告人ノ陳述ヲ聽キ(二)證據ヲ取調ヘ直チニ其ノ言渡ヲ爲ス。證據ハ證據ト同義ニシテ證據ハ犯罪事實ヲ確認スル材料トス。被告人ノ陳述ヲ聽クコトハ即

チ被告人ノ訊問ニシテ一ノ證據方法ニ過ギズ。即チ被告人ノ自白其ノ他ノ供述ハ證據トシテ自由心證ノ資料タルモノトス(刑訴九〇)。故ニ違警罪即決例ニ於テ證據ト相對シテ被告人ノ訊問ヲ併立セシメタルハ意味ヲ爲サズ。主トシテ對席タルコトヲ表ハシタル法文ト見ル可シ。

證據調ニ關シテハ即決例ニ於テハ被告人ノ訊問以外何等規定スル所ナシ。即決權者ハ刑罰權ノ有無及範圍ヲ確定ス可キ事實ニ付テハ自由ニ之ヲ蒐集スルコトヲ得。而シテ其ノ取捨選擇モ亦自由ニシテ即チ自由心證ノ原則ニ依ルコトヲ得。然リト雖モ檢證、差押、搜查、拘引、拘留等ノ強制手段ハ濫リニ之ヲ爲スヲ得サルモノト解ス。但シ證人、參考人、鑑定人等ノ陳述ヲ聽クハ妨ゲザル所ナリ。

(二) 缺席ノ場合ハ(一)證據充分等ノ事實ニ依リ被告人呼出ノ必要ヲ認メス(二)又ハ呼出シタリト雖モ出廷セザル場合ニシテ、此ノ場合ニハ直ニ其ノ言渡書ヲ本人又ハ其ノ住所ニ送達スルニ依リテ即決ヲ爲スコトヲ得。此ノ場合ニ於テモ證據調ハ即決權者ノ自由トス。

第三節 即決言渡ノ形式

一 言渡書ノ作成

即決言渡ニ於テ被告人ヲ拘留又ハ科料ニ處スル場合ニハ對席タルト缺席タルトヲ問ハズ必ズ言渡書ヲ作成スルヲ要ス。言渡書ノ作成ハ即決處分本來ノ性質上及正式裁判申立ノ規定ヨリ考察シテ當然ノコト、爲ス。

即決言渡書ニハ左ノ事項ヲ記載セザル可カラズ(即四)。

- (1) 被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所

是レ被告人ノ人違ナキコトヲ明ラカニスル爲ナリ

法人ノ場合ニ在リテハ明治三十三年法律第五十二號「法人ニ於テ租税及葉煙草專賣ニ關シ事犯アリタル場合ニ關スル件」第二條ニ於テハ「法人ヲ處罰スベキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス」ト規定シ此ノ法律ニ所謂被告人トハ犯罪ノ責任者ヲ代表スル者即チ形式上ノ被告人ヲ謂フ。之ニ依リテ警察命令等ニ於テ罰則ヲ法人ニ適用スルニ當リ同法律ヲ準用スル場合言渡書ニ被告人トシテ記載スルニ當リテハ通常法人ノ代表者ノ氏名ヲ以テスト雖モ法人ノ名稱ニテモ亦可ナリト解ス。

- (2) 犯罪ノ場所、年月日時

犯罪ノ有無ヲ明ラカニシ且時効ノ起算點ヲ知ラムガ爲ナリ。

(3) 罪名

適用法條ヲ明記シテ如何ナル犯罪ナルヤヲ明ラカニスルヲ要ス。

(4) 刑名

判決ニ於ケル主文ニ該當ス。

(5) 正式裁判ヲ請求スルコトヲ得ベキ期限

被告人ノ正式裁判請求權保護ノ爲ナリ。

(6) 即決言渡ヲ爲シタル年月日

正式裁判申立期間及時效ノ起算點ヲ知ラムガ爲ナリ。

(7) 即決言渡ヲ爲シタル警察官署、警察官ノ氏名

即決權者ガ眞ニ當該事件ニツキ管轄權アリヤ否ヤヲ決定スル爲ナリ。

違警罪即決言渡書ハ刑事訴訟法ノ適用ヲ受ク可モノニ非ルヲ

以テ、即決處分ヲ爲ス官吏ノ記名捺印アルヲ以テ足り必ズシ

モ其ノ官吏ノ自署ヲ要スルモノニアラズ(大正二年大審院判決)。

以上ハ法定事項ナルガ更ニ(1)冒頭ニ於テ即決言渡書ナルコト(2)

料料ニ付テハ勞役場留置期間ノ言渡(刑一八第二項)(明治四一、九、二四、

檢事正問合及明治四一、九、二五、民刑甲第二〇九號民刑局長回答。明治四一、九、二一、日記第

一五〇七號富山地方裁判所檢事正質疑及同年、一〇、九、民刑甲第二三六號民刑局長回答。)(3)理由(即

チ罪トナルベキ事實及證據並法律ノ適用)等ヲ明記スルヲ必要ト

ス。(附録書式第二號參照)。(註)。

(註) 數年前迄ハ警視廳ヲ始メ各府縣ニ於テ巡查ノ告發及即決言

渡ヲ同一紙面ニ記載スル様式ヲ採用シタリシガ近來之ヲ改メ

ツ、アルガ如シ。告發書ト言渡書トハ本來性質ヲ異ニスルモ

ノナルガ故ニ全然別紙ヲ用フ可キハ當然ノコトニ屬シ、又之

ヲ同一ニ爲ス時ハ告發アレバ必ズ刑ノ言渡アルガ如キ感ヲ懷カシムル虞アリ。

二 對席ノ場合

對席ノ場合ニ於テハ即決言渡ノ形式ハ口頭ノ告知ヲ以テ足ル。判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ依リテ之ヲ爲シ、判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ヲ以テ其ノ要領ヲ告クル(刑訴二〇四第二項)ヲ以テ之ニ準ジ言渡書ヲ被告人ニ讀ミ聞カスルヲ適當トス可シ。

證據確實ナラズ又ハ罪トナラザル場合ニ於テハ刑罰ヲ科セザル旨ヲ言渡シ直ニ放還ス可シ。此ノ場合刑事訴訟法ニ於ケルガ如キ無罪、免訴等ニ關スル規定ナシ。從ツテ何等特別ナル書類ノ作成ヲ要セズ。

三 缺席ノ場合

缺席ノ場合ニ於テハ即決言渡書ヲ本人又ハ其ノ住所ニ送達スルニ依リテ即決ヲ爲ス。

送達ス可キ言渡書ハ通常原本ノ内容及法律上ノ效力ヲ同一ニスル言渡書正本トス。原本ハ警察官署ニ置ク。是レ警察官署ニ於ケル執務上當然ノコトトス。(附録書式第三號參照)。

送達ハ本人ニ限ラズ、其ノ住所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得。蓋シ言渡書ガ本人ニ告知セラル可キ狀況ニ置カル、ヲ以テ足ルト爲スナリ。然レドモ即決ノ言渡ハ苟モ國家刑罰權ノ發動ニシテ言渡ヲ受ケタル者ハ刑罰ヲ科セラル可キモノナルガ故ニ、其ノ住所ニ於ケル送達ハ何人ニ對シテ之ヲ爲ス可キモノナリヤ疑義ヲ生ズ。違警罪即決例ニ於テハ只單ニ被告人ノ住所ニ送達スル旨ヲ規定スル

ガ故ニ普通郵便ノ如ク屋内ニ投入スルヲ以テ足ルカ家人ノ何人ニ爲スモ可ナリヤ不明ナリ。然レドモ是レ決シテ穩當ト認ムル能ハズ。即決言渡書ノ何タルカヲ解シ得ル知能アリト認メラレ且被告ノ利害ニ付密接ナル關係アル者ニ送達ス可キモノト解ス。即チ被告ニ有利ナル方法ヲ採ル可キハ正ニ理ノ當然トス。故ニ同居ノ成長シタル家族、雇主若ハ支配人等ニ爲スヲ正當ト解ス。尙送達ハ其ノ性質上送達書ヲ以テ之ヲ爲スヲ適當ト信ズ。(警視廳訓令即決處分手續第三條、朝鮮總督府訓令犯罪即決例施行手續第二條)但シ送達ニ當ル者ハ巡查ヲ適當ト爲スト雖モ敢テ巡查、憲兵卒ニ限ルニアラズ、小使等ニテモ可ナリト解ス。又配達證明郵便ニ依ルモ妨ナシ。

言渡書ノ送達ハ之ヲ他ノ警察官署ニ囑託スルヲ妨ゲズ。

送達ノ時期ハ正式裁判申立ニ重大ナル關係アルガ故ニ之ガ取扱

者ハ多大ノ注意ヲ拂フヲ要ス。

四 被告人法人ナル場合

被告人法人ナル場合ニ於テ言渡書ニ被告人ノ氏名トシテ記載ス可キハ法人ノ代表者ノ氏名又ハ法人ノ名稱ニシテ對席ノ場合ニ於ケル即決ノ言渡ハ法人ノ代表者(理事、業務執行社員、支配人等)ニ之ヲ爲シ、缺席ノ場合ニ於テハ代表者ニ言渡書ノ送達ヲ爲ス可モノト解ス。

五 附加刑ノ言渡

即決處分ニ於テハ只主刑タル拘留料ノミナラズ附加刑タル沒收ノ言渡ヲモ爲スコトヲ得ルヤ、積極說ヲ採ル。即決ハ實質上裁判ナリ、判決ナリ。區裁判所ニ於ケル裁判モ即決權者ノ即決モ其ノ實質上國家刑罰權ノ發動タルニ差異ナシ。故ニ區裁判所ガ拘恩

又ハ科料ニ該ル罪ニツキ附加刑ヲ言渡シ得ル以上即決權者モ亦同様ナリト解ス。更ニ違警罪即決例第一條ニ於テ私訴ニ就テハ之ヲ除外スル明文ヲ置クニ拘ラズ附加刑ニ就テハ何等規定スル所ナキニ依リテモ之ヲ察知シ得可シ。

舊刑法ニ於テハ附加刑ニ數種アリタレドモ刑法ハ沒收ノ一種ニ限ル(刑九)。故ニ即決處分ニ於テ主刑タル拘留、科料ト併セテ附加刑タル沒收ヲ言渡スコトヲ得。

然レドモ以上ハ理論上ノ問題ニシテ實際問題トシテハ常ニ慎重ナル取扱ヲ要ス。蓋シ輕微ナル犯罪ニ就キ私人所有ノ財貨ヲ沒收スルハ不當ナル結果ヲ惹起スルコト多ケレバナリ。刑法ハ舊刑法ト異リ沒收ヲ裁判所ノ自由ニ委シ(刑一九)、特ニ拘留又ハ科料ノミニ該ル罪ニ付テハ特別ノ規定アル場合ヲ除キ犯罪行為ヲ組成シ

タル物以外ハ原則トシテ沒收ヲ許サルニ依リテモ之ヲ知ルコトヲ得。

論者或ハ違警罪即決例ニ附加刑執行ノ手續ニ關スル規定ナキヲ理由トシテ積極論ヲ非難スル者アラムモ是レ誤レリ。如何トナレバ即決例ニハ主刑タル拘留、科料ノ執行ニ關シテモ何等規定スル所ナキヲ以テナリ。

第四章 即決處分ノ性質

即決處分ハ司法處分ナリヤ、將行政處分ナリヤ、即チ其ノ法律上ノ性質如何。

即決處分ハ前來述ブル所ノ如ク國家刑罰權ノ具體的行使ニシテ拘留又ハ科料ニ該ル犯罪アルニ際シ刑罰權ノ存否及範圍ヲ確定シ

之ニ對シテ刑罰タル拘留又ハ科料（附加刑ヲ包含ス）ヲ適用スルモノナルガ故ニ、具體的實在事件ヲ審理シテ之ニ法律上ノ效果ヲ附與シテ以テ法規ノ維持ヲ直接ノ目的トスルモノト謂ハザル可カラズ。故ニ即決處分ハ司法處分即チ裁判タル實質ヲ具備スト謂フコトヲ得可シ。故ニ學者或ハ裁判所ノ刑事訴訟ニ對シテ行政應ノ刑事訴訟ナル語ヲ用フルコトアリ。然レドモ是ヲ以テ直ニ即決處分ヲ名實共ニ司法處分即チ裁判ナリト爲スコトヲ得ルヤ否ヤ。

抑立憲法治國ニ於テハ國家主權ノ發動ハ憲法上ノ統治機關ニ依リテ行ハレ、之ヲ原則トシ三權各其ノ機關ヲ異ニス。之ニ依ツテ司法權ハ裁判所ニ依ツテ行使セラル、コト柄トシテ明ラカナリ。裁判所ハ司法權ヲ行使スル機關タルト同時ニ裁判所ニ依ツテ行ハレタルモノニアラザレバ縱令其ノ實質上司法處分ニ屬ス可キモノ

ト雖モ之ヲ司法處分即チ裁判ト稱ス可カラザルモノナリ。是レ憲法ノ形式上ノ保障ニシテ三權分立論ニ則リタル立憲政體ノ下ニ在リテハ當然ノコト、ス。故ニ即決處分ハ縱令實質上司法處分ニ屬ス可キモノナリト雖モ之ガ處分ニ當ル機關ハ司法機關タル裁判所ニ在ラズシテ行政機關タル警察官廳ナルガ故ニ、司法處分ニアラズシテ行政處分ナリト謂ハザル可カラズ。是レ即決例ノ規定ニ見ルモ其ノ第二條ニ於テ「即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒズ」ナル語ヲ用ヒ、又正式裁判申立ノ途ヲ開キテ即決ノ事前手續ニ過ギザルコトヲ明ラカニシ、又公訴ニ限リテ私訴ヲ認メズ、更ニ即決言渡ハ其ノ確定以前ニ執行保全ノ特別處分ヲ爲スコトヲ得ル等司法處分ニアラズシテ行政處分タルコトヲ表ハシタルモノト解セラレ。

第五章 即決處分ニ對スル救濟

第一節 總說

即決處分ハ一般行政處分ノ如ク直ニ其ノ效力ヲ發生スルモノニアラズ。或ル一定ノ期間ノ經過ニ依リテ始メテ其ノ確定力ヲ生ズ。此ノ期間内ニ於テ即決言渡(拘留又ハ科料ノ言渡)ニ對シテ被告人ニ救濟ノ手段ヲ附與ス。即チ正式裁判申立是レナリ。(註一)(註二)。又即決處分ハ行政處分ナリト雖モ一般行政處分ト其ノ性質ヲ異ニシ其ノ實質ハ純然タル司法處分ナルガ故ニ其ノ確定後ハ勿論其ノ確定以前ニアリテモ即決權者自身ト雖モ一旦言渡ヲ爲シ又ハ言渡書ノ送達ヲ爲シタル以上ハ取消變更ヲ爲スコトヲ得ズ。(明治二九、二九、民刑甲第一七號民刑局長回答)。

(註一) 即決處分ニ對シテハ行政上ノ抗告ヲ認ム可シトノ說アリ。

即チ警察官署ノ上級官廳タル地方長官、内務大臣ニ對シテ特ニ抗告ヲ許ス途ヲ開ク可シト爲ス。關東都督府令拘留科料處分規則ニ於テハ處分言渡ニ不服ナル者ハ關東長官ニ不服ノ申立ヲ爲スコトヲ得ト規定ス(同令四)。

(註二) 無罪ノ即決處分ニ對シテモ正式裁判申立ヲ許ス可シトノ說ナキニ非レドモ(明治三〇、九、一八、法曹會決議)是レ法意ニ反スルモノト解ス。

第二節 正式裁判及違警罪裁判所ノ意義

正式裁判トハ通常裁判所ニ於ケル裁判ヲ謂フ。即決處分ハ前述セルガ如ク便宜ヲ唯一ノ根據トスル行政處分ナルガ故ニ之ニ對シテ通常裁判所ニ於ケル審判ヲ正式裁判ト指稱シタルニ過ギズ(即三、五、七)。

違警罪即決例第三條及第六條ニ所謂違警罪裁判所トハ拘留又ハ科料ニ該ル罪ヲ管轄スル裁判所ヲ意味シ今日區裁判所之ニ該當ス(裁構二六)。即決例ニハ違警罪裁判所ニ對シテ正式裁判ノ請求ヲ爲シ得ル旨ヲ規定セルガ故ニ或ハ何レノ區裁判所ニ對シテモ可ナルガ如ク見ユレドモ、管轄權ナキ裁判所ハ其ノ事件ニツキ審判ヲ爲ス能ハザルハ刑事訴訟法上ノ原則ナルガ故ニ本來其ノ事件ニツキ管轄權アル裁判所ニ對シテ申立テザル可カラズ。如此裁判所ハ即チ犯罪地又ハ被告人所在地ヲ管轄スル區裁判所トス(刑訴二六)。

第三節 正式裁判申立ノ意義及方式

一 意義

正式裁判申立トハ即決處分ニ服セズ本來事件ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ノ審理判決ヲ要求スル意思表示ヲ謂フ。正式裁判申立ハ

即決言渡ノ實質及形式双方ニ關シテ之ヲ爲スコトヲ得。即チ犯罪ノ有無、刑ノ量定ニ就テ爲スコトヲ得可ク又即決言渡ニ於ケル即決權者ノ權限ノ欠缺、言渡書ガ法定ノ記載事項ヲ缺ク違式ノモノナルコトヲ理由トシテ之ヲ爲スコトヲ得可シ。又被告人ハ刑ノ言渡即チ即決處分ノ内容ノ不法不當ヲ理由トシテ正式裁判申立ヲ爲スコトアルノミナラズ、又警察官署ノ即決自體ヲ快シトセズ(縱令刑其ノ者ニハ不服ナシトシテモ)司法權行使ノ機關タル裁判所ノ審判ヲ受ケムガ爲ニ此ノ申立ヲ爲スコトアルベシ(即三)。

二 方式

正式裁判申立ノ方式ハ正式裁判請求申立書ノ提出ナリ。正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ管轄區裁判所ニ對シテ之ヲ申立ツ可ク、其ノ申立書ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察官署ニ差出スコトヲ要ス(即

三、五。

正式裁判申立ハ申立書ニ依ラザレバ無効ナリト雖モ、其ノ書類ノ内容記載ニシテ適式ナル以上宛名ヲ區裁判所ト爲ス可キヲ誤リテ警察署長ト爲スモ妨ナシトスルコト判例ナリ(大正三年大審院判決)

三 正式裁判申立書ノ形式

正式裁判申立書ノ記載事項ニ就テハ即決例ニ何等明記スル所ナシト雖モ其ノ性質上ヨリ少クトモ左ノ事項ノ記載ヲ要スト解ス。

- (1) 正式裁判ヲ請求スル意思表示
- (2) 正式裁判ヲ請求セムトスル即決言渡ノ表示
即チ何年何月何日何罪ニ依リ何警察署ニ於テ何人ニ依リ言渡サレタルモノナルカヲ明ラカニスルヲ要ス。
- (3) 正式裁判申立ノ年月日

申立ノ年月日ハ其ノ効力ニ至大ノ關係アルヲ以テ之ヲ明記スルヲ必要トス。若シ其ノ申立ノ日ヲ記載セズ、又ハ記載スルモ不明ナルトキハ其ノ申立ガ言渡又ハ言渡書ノ送達後幾何ノ日子ヲ經過シタルヤ不明ニシテ其ノ効力ノ有無決定ノ標準ヲ缺クニ至ル可シ。

(4) 申立人ノ署名捺印

申立人ノ何人ナリヤハ申立ノ効力ニ關スルヲ以テ之ヲ記載スルハ必要ナリ。署名捺印シ能ハサルモノハ代書捺印ニテモ可ナリ。

(5) 管轄裁判所ノ記載

正式裁判ノ請求ハ之ヲ管轄區裁判所ニ對シテ爲ス可キモノナルガ故ニ之ヲ明記スルヲ要ス。又申立書ハ警察官署ニ提出

スルモノナレドモ警察官署ニ對シテ正式裁判ヲ請求スルモノニアラザルガ故ニ警察官署ニ宛ツ可キニアラズ。特ニ檢事局ハ書類經由ノ必然的順序ニ過ギザルガ故ニ之ニ宛ツベキモノニアラズ。此ノ點ニ於テ大審院判決ガ「正式裁判請求ノ申立書ガ警察署長宛ニ記載シアリテ當然區裁判所ニ申立タル形跡存セザル場合ト雖モ苟モ該申立書ニ因リ正式裁判ヲ請求スル意思ノ表示アリタルモノト認ムルニ足ル以上ハ其ノ申立ヲ受理スベキ官廳ノ表示ニ錯誤アリタルガ爲ニ該申立書ヲ無効ナリト爲スヲ得ズ」ト爲シ、又「正式裁判ノ請求書ヲ提出スルニ當リ宛名ヲ區裁判所ト爲スベキヲ誤リテ警察署長ト爲スモ右請求書ノ内容記載ニシテ適式ナル以上裁判所ハ其ノ請求ヲ容レ正式裁判ヲ爲ス可キ筈ナルニ原審カ公訴不受理ノ裁判ヲ爲

シタルハ違法ナリ(大正三年大審院判決)ト爲セルハ即決例第三條ノ正當ナル解釋ニアラズト解ス。

正式裁判ノ申立ハ即決ノ言渡ニ對シテ之ヲ爲スモノナレバ告發書又ハ形式上完全ナル即決言渡書ノ存在ヲ必要トセズ、苟モ即決言渡書ト認ムベキモノアレバ足ルモノトス。從テ即決言渡書及告發書ノ適法ナルト否トハ正式裁判ノ申立ニ影響ナシ(大正二年大審院判決)。正式裁判ヲ經ズシテ直ニ上訴ヲ爲スコトヲ許サズ(即三但書)。

第四節 正式裁判申立權利者

正式裁判申立ヲ爲シ得ル者ハ被告人ニ限ル。上訴ハ法定代理人又ハ辯護人之ヲ爲スコトヲ得ルモ(刑訴二四三、二四四)正式裁判申立ニ就テハ即決例ニ何等規定ナキガ故ニ言渡ヲ受ケタル本人ニ限ルト解ス(大正三、一〇、三、大審院判決)。即チ訴訟行爲ニ就テハ特別明文アルニア

ラザレバ代理ヲ許サルヲ原則トシ、刑事訴訟法上上訴ニ就テモ委任代理人ニ依ル上訴ヲ許サズトスルヲ通説トスルニ照シテモ明ラカナリ。故ニ正式裁判ノ請求ハ他人ニ於テ被告人ニ代リ又ハ獨立シテ之ヲ爲スコトヲ得ズ。從ツテ本人以外ノ者ニ依ル正式裁判申立ハ無効トス。(註一)(註二)

(明治四二、八、二五、電報甲府區裁判所判事問合及同年、同月、二八、民刑甲第一三七號民刑局長回答)

(註一) 代理人ニ依ル正式裁判申立トハ代理人ノ名ヲ以テスルモノヲ指シ、申立書ヲ警察官署ニ持參出頭スルモノハ本人ナルト代理人ナルトヲ問ハズ。又郵便ニ依ルトヲ問ハズ。本人ノ名ヲ以テスレバ可ナリ。是レ説明ノ要ナク明々白々ノコトナレドモ嘗テ某警察署ニ於テ誤解ヲ生ジタル實例アルガ故ニ説明スルノミ。

(註二) 明治十八年布告第三十一號違警罪即決例ハ諸般ノ弊害ニ

鑑ミ他人ノ爲ニスル正式裁判ノ請求ヲ禁止シ些ノ除外例ヲモ認メザルモノトス(大正三年大審院判決)

第五節 正式裁判申立期間

一 正式裁判申立ヲ爲シ得ル期間ハ對席ノ場合ト缺席ノ場合ト異ナル(即五但書)。

(1) 對席ノ場合(第二條第一項ノ場合)ニ於テハ即決ノ言渡アリタルヨリ三日内

(2) 缺席ノ場合(第二條第二項ノ場合)ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内

二者ノ區別ハ被告人ガ即決言渡ヲ知ルニ遲速アル可キヲ推測シタル結果ナル可シ。

二 期間起算點

即決例ノ用語トシテ「言渡アリタルヨリ」又「言渡書ノ送達アリタルヨリ」ト規定セルガ故ニ期間ノ起算點ニ就キ疑問ヲ生ズ。即チ初日ヲ算入スルヤ否ヤノ問題ナリ。即決例ハ必ズシモ刑事訴訟法ノ期間ニ關スル規定ヲ準用スルノ要ナシト雖モ刑事訴訟手續ノ原則タル刑事訴訟法ノ規定ノ精神ニ則リ且被告人ニ有利ナル解釋ヲ下スヲ以テ條理ニ適合スト解スルガ故ニ初日ヲ算入セズシテ翌日ヨリ起算シテ三日又ハ五日ト爲スヲ正當ト解ス(明治二六、二七、三、保第二年、同月、一六、刑甲第一三六號司法次官回答)。又期間ノ最終日ガ休暇日ニ當ルト雖モ期間ニ算入ス可キモノトス。如何トナレバ警察官署ハ不眠不休休暇ナク何時ニテモ職ヲ執ル官署ナルヲ以テナリ(明治四二、七、七、電報室蘭區裁判所檢事問合及同年、同月、九、民刑甲第一二六號民刑局長回答)。但シ大審院判決ハ「正式裁判申立ノ期間計算ニ關シテ違警罪即決例中何等ノ規定ナキヲ以テ刑事訴訟法第十五條ニ準據シ期間ノ初

日ヲ算入セザルト共ニ其ノ末日ガ休暇ニ當ルトキハ亦之ヲ算入スベカラザルモノト解スルヲ正當トス」ト爲ス(大正五年大審院判決)。

如斯解スル時ハ初日ハ正式裁判ノ申立ヲ爲シ得ザルニノ疑問ヲ生ズルガ如シト雖モ然ラズ。此ノ規定ハ只正式裁判申立ノ期限決定ニ關スルモノニシテ始期及終期ヲ明ラカニシテ以テ其ノ期間内ノ行爲ノミ有效ト爲ス趣旨ニアラズ。故ニ初日即チ言渡又ハ送達ノ當日ト雖モ正式裁判申立ヲ爲スヲ得。

三 期間ノ進行ハ言渡又ハ言渡書ノ送達アリタルトキヨリ生ズルガ故ニ被告人ガ言渡書ノ送達ヲ實際了知セザル場合ト雖モ期間滿了ニ影響ナシ。正式裁判申立書ハ警察官署ニ提出ス可キモノナルガ故ニ刑事訴訟法ノ里程猶豫ヲ與ヘズ(明治四二、九、二五、電報警井刑區裁判第一四五號民刑局長回答)。

四 期間經過ノ效力

正式裁判申立期間ノ經過ニ依リテ被告人ハ失權ノ制裁ヲ受ク。即チ正式裁判申立ノ權利ヲ喪失ス。是ニ於テ即決ノ言渡ハ確定力ヲ生ジ、裁判所ニ於ケル確定判決ト同一ノ效力ヲ有スルニ至ル(即七)從ツテ公訴權消滅ノ原因タリ。故ニ即決言渡ニ依リ確定シタル罪ト他ノ裁判確定前ニ犯シタル罪トノ間ニ併合罪ノ關係アリト認ムルモ失當ニアラズ(大正二年大審院判決)。

第六節 正式裁判申立ノ效力

被告人ガ即決言渡ニ對シテ區裁判所ニ正式裁判ヲ請求ス可ク申立書ヲ差出シタルトキハ警察官署ハ申立後二十四時間内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ當該區裁判所ノ檢事ニ送致スルヲ要ス。而シテ申立ノ成立不成立ヲ決定スルノ權限ハ裁判所ニ屬スルヲ以テ從

令代理人ノ名ニ於テシ又ハ期間經過後等ノ事由ニ依リ不適法ナル申立ト思料セラル可キ場合ニ於テモ一應被告人ニ對シテ其ノ事由ヲ指示シテ其ノ反省ヲ促スハ可ナリト雖モ、被告人所在不明又ハ申立書ノ受理ヲ強要スル者ニ在リテハ一件書類ヲ檢事ニ送致ス可キモノニシテ警察官署限リニ處理ス可キモノニアラズ(明治二四、一、二區裁判所檢事請訓及同年、二、一、八、刑甲第五〇號司法大臣訓令)。

被告人ガ即決言渡ニ對シテ區裁判所ニ正式裁判ヲ請求シタルトキハ即決處分ハ直ニ其ノ效力ヲ失フト同時ニ該處分ニ依リテ公訴範圍ノ定マレル事案ハ檢事ノ公訴提起ノ手續ナクシテ當然裁判所ニ繫屬ス。即チ正式裁判ノ請求ハ被告人ヨリ直接ニ之ヲ區裁判所ニ爲スモノナルヲ以テ其ノ請求ニ依リ該事件ハ全然公訴提起ナキニ拘ラズ特殊ノ訴訟行為ニ依リ公訴事件トシテ直ニ區裁判所ニ繫

屬シタルモノトス(大正三年大審院判決)。故ニ檢事ハ正式ノ裁判申立ニ依リ訴訟書類ノ送致ヲ受ケタルトキハ之ヲ裁判所ニ提出シテ公判ヲ求ム可シ。即チ當該事件ノ書類ノ送致ヲ受ケタル檢事ガ該書類ヲ其ノ裁判所ニ提出スルハ唯書類經由ノ必然的順序タルニ止リ決シテ公訴提起ノ性質ヲ有スルモノニ非ズ。故ニ其ノ書類提出ノ書面ニハ起訴ノ趣旨ヲ記載スルノ必要ナシ、檢事ハ特ニ起訴ノ手續ヲ爲スコトナク從ツテ又不起訴處分ヲ爲スコトヲ得ズ(大正三、一〇、三。大審院判決)。故ニ公訴ノ時効ハ正式裁判ノ爲メ被告人ニ對シテ呼出狀ヲ發スルトキヲ以テ中斷セラル(註)。(明治二八、六、二五、日記第四六號前橋地方裁判所檢事正問合及同年七月、三十一、民刑甲第一七號民刑局長回答。明治三二、五、二〇、日記第二四二號奈良地方裁判所檢事正問合及同年、同。)

正式裁判申立ニ依リテ公訴事件區裁判所ニ繫屬スルニ依リ申立人ト雖モ之ガ取下ヲ請求スルコトヲ得ズ。

(註) 前述シタル所ハ今日大審院判例ノ示ス所ニシテ司法當局實際ノ取扱ト爲ス。然レドモ正式裁判申立ニ依リテ事案ハ直ニ裁判所ニ繫屬シ敢テ檢事ノ起訴ノ手續ヲ要セズト爲スガ正當ナル解釋ナリヤ否ヤニ就テハ反對說アリ。曰ク

正式裁判申立ニ依リテ即決處分ガ其ノ効力ヲ失フト解スルハ可ナリ、然レドモ之ヨリシテ直ニ事件ハ裁判所ニ繫屬スト論斷スル能ハザル可シ。即決處分効力ノ消滅ト共ニ事件ハ未ダ裁判所ニ繫屬スルニ至ラズ檢事ノ起訴手續ヲ要スル狀況ニ在リト解スルヲ正當トス。如何トナレバ

(1) 公訴ニ關スル刑事訴訟法ノ規定ニ違反ス。即チ一般ノ犯罪ニツキ區裁判所ノ審判ハ(第一) 檢事ノ起訴ヲ必要トスルコト、(第二) 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移スノ

裁判アルコトヲ必要トスルコト刑事訴訟法ノ規定トス(刑訴
二二二)。

(2) 正式裁判ノ申立ヲ爲ス者ハ不當ナル即決處分ノ消滅ヲ希望シテ、受刑ヲ希望スル者ニアラズ。之ニ反シテ公訴ノ提起ハ犯人ニ對スル科刑ヲ目的トス。故ニ受刑ヲ欲セザル意志表示ヲ以テ科刑要求ノ意思表示ノ効力ヲ有セシムルコトハ法理上ノ根據ヲ缺クモノナリ。

(3) 違警罪即決例第三條ノ規定ハ正式裁判ハ何レノ裁判所ニ於テ審理スルヤヲ示シタルニ過ギズシテ檢事ノ起訴ヲ排除スル意思ヲ表示セズ。

(4) 即決例第六條ニ於テ申立書ヲ受理シタル警察官署ハ訴訟書類ヲ裁判所檢事ニ送致ス可キコトヲ規定シタルハ檢事ヨ

リ書類ヲ裁判所ニ送致ス可キ旨ヲ規定シタルニアラズ。又第十二條ハ處置セラレタル被處分者ガ正式裁判ヲ請求シタル結果呼出狀ノ送達アリタル場合ニ留置ヲ解ク可キコトヲ規定セルニ止リ、兩條共ニ檢事ノ申立ヲ爲スノ要ナキ趣旨ノ法意ヲ包含セス、且第六條ガ一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スベシト規定シタルニ依レバ檢事ガ更ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可キコトヲ豫想セルモノト解スルヲ得可シ。何者即決言渡又ハ正式裁判ノ申立ニ依リ既ニ公訴ノ起リタルモノナラバ明文無クトモ一件書類ヲ裁判所ニ送致スルヲ當然ノ順序トスルモノナレバナリ。

(5) 檢事ハ罰金以上ノ刑ニ該ル重大ナル犯罪ニツキ不起訴處分ヲ爲シ得ルニ拘ラズ、拘留又ハ科料ニ該ル輕微ナル犯罪

ニツキ之ヲ認メザルハ不權衡ナリ。

(6) 正式裁判申立ニヨリ公訴成立シタリトスルトキハ被處分者ガ再考ノ結果即決處分ヲ正當ト認メ正式裁判申立ヲ取消スモ其ノ取消ハ法律上何等ノ効力ナキモノニシテ裁判所ハ實益ナキ手續ヲ施行セサル可カラズ。手續上不經濟ノ原因タルモノナリ。

(7) 檢事ガ事件ヲ調査シ犯罪ヲ構成セス或ハ時効ノ成就シ或ハ既ニ確定判決アリ或ハ公訴不受理ノ原因アルコトヲ發見セバ不起訴處分ヲ爲スコトヲ得可ク即チ無益ニ訴訟手續ヲ開始セズシテ事件ヲ完結スルコトヲ得。

以上列記スル理由ニ依リ檢事ノ起訴ヲ要スト爲スヲ正當トス可ク從ツテ警察官署ハ訴訟書類ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ其ノ事件

ニツキ公訴ヲ提起ス可キヤ否ヤヲ調査シ犯罪ノ證據充分ニテ公訴權消滅セズ、且起訴ノ價值アリト思料シタルトキハ刑事訴訟法ノ手續ニ從ヒ公訴ヲ提起シ、若シ然ラズト思料シタルトキハ不起訴處分ヲ爲ス可シ。即チ即決處分ハ先ヅ檢事ノ意見ニ依リ次に裁判所ノ審判ニ依リ其ノ適法ナリヤ否ヤ正當ナリヤ否ヤヲ決セラル可キモノト解スト。

然レドモ此ノ反對說必ズシモ正シカラズト解ス。如何トナレバ(1) 一般ニ犯罪ニツキ裁判所ガ審判ヲ爲スニハ必ズ檢事ノ起訴ヲ要スト雖モ即決處分ハ特別ナル手續ニシテ其ノ正式裁判申立モ亦違警罪即決例ニ於テ認メラレタル特別ノ規定ナルガ故ニ必ズシモ檢事ノ起訴ヲ必要トストイフ可カラズ。(2) 正式裁判申立ハ必ズシモ之ヲ起訴ト同一行爲ナリト解ス

- ルニアラズ。正式裁判申立ナル特殊ノ訴訟行爲ノ當然ノ結果トシテ公訴提起ノ法律關係ヲ發生スルノミ。故ニ受刑ヲ欲セザル意思表示ヲ以テ科刑要求ノ意思表示ノ効力ヲ有セシムト即斷スル能ハズ。假リニ然リトスルモ裁判所ニ於テハ必ズシモ請求者ノ利益ナル裁判ヲ爲ス可キモノト限ラズ。
- (3) 即決例第三條ノ正式裁判ヲ請求セムトスル者ハ違警罪裁判所ニ對シテ之ヲ爲ス可ク、區裁判所ハ其請求ニ依リ當然事件ヲ受ク可キモノニシテ警察署又ハ檢事局ニ對シテ爲ス可キモノニアラザルヲ規定ス。警察署及檢事ハ只書類經由ノ順序タル可キヲ定メタルノミ。
- (4) 訴訟書類ガ檢事ヲ經由ス可キヲ規定シタルハ正式裁判申立ガ存在スルコトヲ檢事ヲシテ認知セシムルコト正式裁判

手續上必要ナルヲ以テナリ。

- (5) 罰金以上ノ刑ニ該ル罪ニツキ檢事ノ不起訴處分ヲ認メテ拘留又ハ科料ニ該ル罪ニツキ之ヲ認メザルハ不權衡ノ嫌アレドモ是レ即決處分ガ特別手續タルヨリ生ズル結果ニシテ如何トモスル能ハズ。
- (6) 被告人自身ニ依ル正式裁判申立ノ取消ヲ認ムル能ハズ又檢事ノ不起訴處分ヲ認メザル結果手續上不經濟ノ原因タリトノ非難ハ特別處分タル即決處分ニ就テハ止ムヲ得ザル可ク、又多クノ場合裁判所ハ實益ナキ手續ヲ爲スガ如シト雖モ必ズシモ然ラズ。裁判所ハ自己ノ判斷ニヨリ被告人ガ縱令即決言渡ニ悦服ストモ無罪ノ判決ヲ爲シ得ルモノナリ。
- (7) 檢事ノ不適法又ハ管轄違ノ申立ニ就テハ如何ニ之ヲ決定

ス可キヤ、若シ申立ヲ却下ス可キモトノセバ正式裁判申立ノ權ヲ奪フニ至ル。若シ如此場合ニハ必ズ起訴ス可キモノトセバ檢事ノ權限ヲ制限スルノ結果ニ陷ル可シ。

以上列記スル理由ニ依リ正式裁判申立ト同時ニ即決處分ハ其ノ效力ヲ喪失シ事件ハ區裁判所ニ繫屬スト爲ス大審院判決ヲ正當ナリト解ス。

第七節 正式裁判手續

區裁判所ガ檢事ヨリ訴訟書類ノ送致ヲ受ケタルトキハ是レ裁判所ガ即決處分ニ依リテ限定セラレタル訴訟事件ガ該裁判所ニ繫屬セシコトヲ認知シタル時ナリ。故ニ期日ヲ定メテ檢事及被告人ヲ呼出ス。區裁判所ニ於ケル訴訟手續ハ全ク刑事訴訟法ノ規定ニ由ル。區裁判所ハ審理ノ結果左ノ判決ヲ下ス可シ。

(1) 棄却ノ判決

正式裁判申立ガ不適法ナルトキ、例ヘバ期間經過後ノ申立ナルトキ又ハ被告人以外ノ者ヨリ爲セル請求ナルトキハ其ノ請求ヲ棄却スル判決ヲ爲ス(大正三、一〇、三〇、大審院判決)。

(2) 本案ノ判決

正式裁判ノ申立ガ適法ニシテ且管轄權ヲ有スルトキハ即決言渡ノ正當ナリヤ否ヤヲ區別セズ本案ニ付審理ヲ爲シ有罪ナリト思料セバ刑ノ言渡、無罪ナリトセバ無罪ノ言渡ヲ爲ス。刑ノ量定モ亦區裁判所ノ專權ニ屬スルモノナレバ即決處分ヨリ重キ刑ノ言渡ヲ妨ゲズ(大正二年大審院判決)。

區裁判所ノ判決ニ對シテハ上訴ヲ爲シ得ルハ當然トス。棄却ノ判決ガ確定シタルトキハ即決處分ハ其ノ有效ヲ證明セラレ確定力

ヲ有ス(註)。

正式裁判審理中其ノ正式裁判ヲ請求シタル犯罪ガ罰金以上ノ刑ニ該ル可キコトヲ發見シタルトキハ普通ノ手續ニ依リ處分ス可キモノトス。

(註) 正式裁判ノ請求ニシテ不適式ナルトキハ其事件ニ付テハ公訴ノ提起ナク且公訴ノ當然裁判所ニ繫屬セザリシモノニシテ固ヨリ公訴ノ存在ヲ認ムルニ由ナク從テ其ノ受理又ハ不受理ノ問題ヲ生ズベキ謂レナキモノトス(大正三年大審院判決)。

第六章 即決處分ニ對スル執行保全ノ方法

第一節 總說

刑ノ執行ハ判決確定シテ後始メテ之ヲ爲ス可キモノナリ(刑訴

三一七)。故ニ上訴期間中ハ之ガ執行ナク、又之ニ對スル特別處分ヲモ許サバルハ刑事訴訟法ノ定ムル所ナリ。

然ルニ即決處分ニ對シテハ之ガ確定前即チ正式裁判申立期間内ニ於テ特別ナル處分ヲ爲ス權限ヲ即決權者ニ與ヘタリ。即チ即決例第八條乃至第十三條ニ規定スル所ナリ。此ノ特別處分ハ假リニ行フ所ニシテ其ノ目的ハ即決處分ノ執行保全ニ在リ。即チ被告人ノ情況ニ依リ言渡シタル刑ノ執行不能ニ終ラムコトヲ豫防セムガ爲ナリ。

此ノ特別處分ハ即決言渡ヲ爲シタル官吏ガ必要ト認ムル場合ニ於テ之ヲ爲シ得ル任意的規定ニシテ強行的規定ニアラザレドモ(即八)刑ハ確定後執行ストイフ刑事訴訟法ノ大原則ニ反シ確定以前ニ於テ人ノ權利自由ヲ制限スルコト大ナル規定ナルガ故ニ、之ガ

適用ニ當リテハ最モ慎重ナル考慮ヲ要ス。重大ナル犯罪ニ非ル限リ確定前ニ被告人ヲ拘留セザルハ刑事訴訟法ノ規定ニシテ罰金以下ノ刑ニ該ル犯罪ニ就テハ決シテ被告人ヲ確定前ニ拘留スルコトナシ。縱令懲役禁錮ニ該ル罪ニ就テモ情狀ニ依リ被告人ヲ拘留セザルコト今日ノ實際取扱ナリ。違警罪即決例ハ此ノ原則ニ反シテ確定前即決官ニ對シテ特別ナル強制手段ヲ許容シタルガ故ニ實際ノ場合ニ於テ被告人ニ與ヘラレタル即決處分ニ對スル救濟手段タル正式裁判申立ノ途ヲ杜絶シ、憲法ニ於テ保障シタル臣民ノ權利ヲ實行スル能ハザルニ至ラシムルコトナキニシモアラズ。所謂人權蹂躪ノ非難ヲ發セラル、モ主トシテ是ニ關シテナリ。故ニ即決官タル者ハ必要止ムヲ得ザル場合ノ外此ノ例外的手段ヲ用フベカラズ。

第二節 科料ノ言渡ヲ爲シタル場合

科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其ノ金額ヲ假納セシムルコトヲ得。之ヲ假納金ト稱ス。若シ之ヲ納メザル時ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ被告人ヲ留置スルコトヲ得。其ノ一圓ニ滿タザル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス(即九)。留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入ス(即一二)。

留置中假納金ヲ差出シタルトキハ留置日數ニ相當スル金額ヲ控除シタル殘額ヲ徵收シテ其ノ留置ヲ解ク可キモノトス。留置ニ當リテハ留置命令書ヲ作成シテ之ヲ被告人ニ讀聞カス可キヲ適當トス(附録書式第五號參照)。

此ノ留置ハ即決例ニ於テ特ニ認メラレタル非常手段ナルガ故ニ刑法第十八條ニ所謂勞役場留置ニアラズ。勞役場留置ハ刑ノ確定

後ニ於ケル換刑處分ナレバナリ。從ツテ即決例第九條ノ規定ガ刑法第十八條ノ規定ニ依リテ自然消滅ニ歸シタリト爲ス能ハズ。二者併立シテ存在ス(明治四一、九、二六、電報宮崎地方裁判所檢事正問合及同年、同月、二八、民刑甲判所檢事正問合及同年、七、二、二、四、號民刑局長回答。明治四二、六、二四、檢乙第二一九七號仙臺地方裁判所檢事正問合及同年、七、二、二、四、號民刑局長回答。明治四二、六、二四、檢乙第二一九七號仙臺地方裁判所檢事正問合及同年、七、二、二、四、號民刑局長回答。明治四一、一〇、三、三、號民刑局長通牒、檢事、廳府縣長官宛)。故ニ違警罪即決例ニ依リ科料ノ言渡ヲ爲スニ當リ科料ヲ完納スルコト能ハザル場合ニ於テ刑法第十八條第二項第三項ヲ適用シ勞役場留置ノ期間ヲ定メテ科料ノ言渡ト共ニ之ヲ言渡スコトヲ得(明治四一、九、一五、日記第四一〇七號安濃川地方裁判所檢事正問合及同年、同月、二六、民刑甲第一九七號民刑局長回答。明治四一、九、二九、檢乙第二八五五號仙臺地方裁判所檢事正問合及同年、一〇、二、六、民刑甲第二二七號民刑局長回答。明治四一、一〇、三、三、號民刑局長通牒、檢事、廳府縣長官宛)。

科料ヲ納付セザル者ノ留置日數ハ言渡確定後一日ヲ一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入ス可キモノナルガ故ニ算入セラレタル金額ニ相當スル勞役場留置ハ之ヲ執行スルコトヲ得ズ(明治四一、一〇、九、民刑甲第二三三號民刑局長回答)。

而シテ即決例第九條ニハ一圓ヲ一日ニ、又第十三條ニハ一日ヲ一圓ニ折算スト爲シ、刑法第十八條第二項ニハ一日以上三十日以下ノ期間ト爲シ、同第十七條ニハ科料ハ十錢以上二十圓未滿トスト規定セルガ故ニ、即決例ト刑法トノ規定ニ於テ金額ト期間トノ比例異ナルヲ知ル(明治四二、六、二四、檢乙第二一九七號仙臺地方裁判所檢事正問合及同年、七、二、二、四、號民刑甲第一二二三號民刑局長回答)。

假納金ヲ納付セシムルコトハ實際ノ便宜上(警察官署及被告人双方ノ便利)或ハ適當ナル可シト雖モ之ヲ納付セザルノ故ヲ以テ留置ヲ爲スハ不當ナル規定ニシテ特別止ムヲ得ザル場合ニ限り常時用フ可キ手段ニアラズ。今日實際取扱ニ於テ此ノ規定ヲ適用スル者殆ド無キガ如シ。

假納金ハ即決處分ニ對スル執行保全ノ方法ナルガ故ニ其ノ法律關係ハ即決處分ト運命ヲ共ニス可ク、科料ノ言渡確定シタル時始

メテ國家ノ歳入ト爲ス可ク、若シ正式裁判申立ガ裁判所ニ於テ成立シタル時ハ（即決處分消滅ノ確認セラレタルトキナルガ故ニ）之ヲ被告ニ返還ス可キモノトス。蓋シ假納金ノ徵收ハ即決處分ニ附隨シタル特別處分ナルガ故ニ即決處分消滅スレバ其ノ金圓領置ノ必要モ亦消滅シ、正式裁判ニハ何等ノ關係ナキヲ以テナリ。特ニ況ンヤ裁判所ニ於ケル判決ハ無罪ナルコトアリ、又科料ニ代ヘテ拘留タルコトアリ、又刑ノ量定ヲ異ニスルコトアルニ於テヲヤ。然ルニ假納金ヲ受領シタル警察官署ハ直ニ之ヲ豫算外ノ歳入ト爲ス可キコト警視總監ニ對スル大藏大臣ノ指令ニアリ（註）。司法省又之ニ從フ。是レ前述ノ理由ニ依リ不當ナル處分ナルヲ知ルノミナラス實際ノ取扱上亦甚ダ繁雜ナル手數ヲ要ス。故ニ假納金ハ即決處分ノ確定ニ至ル間警察官署ニ於テ保管シ確定後始メテ本刑ニ換

フ可シ。

正式裁判ノ判決ガ即決言渡ト同額ナルカ又ハ之ヨリ多額ナル場合ハ、判決ノ執行ヲ爲サズ又ハ差額ヲ徵收スルノ便宜取扱ヲ爲シ得ルモ無罪又ハ少額ノ科料ヲ言渡シ又ハ科料ニ代ヘテ拘留ノ言渡ヲ爲シタル場合一旦歳入ト決定シタル假納金ヲ如何ニス可キヤ。國家ノ歳出ハ法定ノ事由アルニ非レバ之ヲ爲ス能ハズ。被告人ニ假納金ヲ返還ス可キ途如何。科料金假納金ヨリ少額ナルトキ又ハ無罪ノ言渡ナルトキハ被告人ハ曩ニ假納金ヲ納附シタル警察官署ニ對シ其ノ下戻ヲ請求スルコトヲ得ル旨明治二十九年五月二十七日民刑甲第二二七號民刑局長回答及同年七月八日民刑甲第二六八號司法大臣訓令ニアリ。然ラバ警察官署ニ於テハ如何ナル取扱ヲ爲ス可キカ。豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歳入ニ組入ル可ク（會計

法二三) 假納金ノ返還ハ新ナル名義ニヨリ豫算外歳出ト爲サ、ル可カラズ。一旦國庫ニ歸屬シタル假納金ハ正式裁判ノ結果縱令無罪ノ判決アリトモ直ニ之ヲ被告人ニ返還スル能ハズ。新ナル正當ナル債務名義ニ依リテ支出ヲ爲シ得ルノミ。故ニ警察官署ニ於テハ事情ヲ具シテ國家ノ歳出ヲ掌ル大藏大臣ニ上申シ大藏大臣ノ命ニ依リ國家歳出ノ委任ヲ受ケタル出納官吏タル地方長官(警視總監ヲ含ム)之ガ支拂命令ヲ發スルノ外途ナカル可シ(會計法一三、一五)。警察官署長ハ分任收入官吏ニシテ支拂命令ヲ發スル權限ナシ。假納金ハ通貨(現金)ヲ以テ納付ス可ク印紙ヲ用フル能ハズ。今日各警察官署ニ於ケル實際取扱ノ狀況ヲ見ルニ收入印紙ヲ假納金トシテ受理スルガ如シ。是レ誤レルノ甚ダシキモノニシテ被告人ガ言渡ノ即時又ハ即決言渡ノ確定前印紙ヲ提出スルコトアルハ

實際双方ノ便宜トスル所ナレドモ之ヲ假納金トシテ取扱フ可カラズシテ只確定ニ至ル迄警察官署ハ被告人ノ意思ヲ推量シ好意的ニ之ヲ保管シテ確定ニ至リ始メテ科料徴收ノ手續ヲ採ル可キモノトス。假納金ヲ納付セザルノ故ヲ以テ留置シタル者正式裁判ヲ請求シ因テ裁判所ヨリ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直ニ留置ヲ解クヲ要ス(即一三)。

(註) 明治十九年四月二十九日大藏省主計局長通知

違警罪即決例第九條ニ據リ假納スル科料金ハ其際直ニ歳入ニ收入スヘキ旨當省大臣ヨリ警視廳へ指令相成候ニ付爲念及御通知候也。

第三節 拘留ノ言渡ヲ爲シタル場合

拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其ノ刑期ニ相當

スル金額ヲ保證トシテ差出サシムルコトヲ得。之ヲ保證金ト稱ス。若シ差出サ、ル者ハ正式裁判申立期間内即チ對席ノ場合ハ言渡當日ヨリ四日內、缺席ノ場合ハ言渡書ノ送達當日ヨリ六日間被告入ヲ留置ス(明治二六、二一、一六、刑甲)。但シ刑期五日內ナル時ハ其ノ日數ニ過グルコトヲ得ズ(即一〇)。此ノ規定モ亦任意的規定ニシテ保證金ヲ差出サシムル必要ナキ場合ハ之ヲ徵收セズ、言渡確定後刑ノ執行ヲ爲ス可シ。保證金ヲ差出サザルニ依ル留置ハ執行保全ノ方法ニシテ換刑處分タル勞役場留置ト全然異ナルハ明ラカナリ。留置執行中保證金ヲ差出シタル場合ハ留置日數ニ相當スル金額ヲ控除シタル殘額ヲ徵收シテ其ノ留置ヲ解ク。留置ノ初日保證金ヲ差出シタルニ依リ留置ヲ解ク場合ニ於テ一日ニ充タズト雖モ一圓ニ折算スルコトヲ得(明治四四、一〇、一四、警發第一二九號內務省警保局長)。問題トナル

ハ留置中保證金ヲ差出シタル場合ニ即決官ハ當然保證金ヲ受理シテ留置ヲ解カサル可カラザルカ。留置ヲ解クヲ要スト爲ス說アレドモ、苟モ即決權者ガ自己ノ權限ニ依リ爲シタル處分ニ就テハ法ニ明文ナキ以上之ヲ取消スヤ否ヤハ自己ノ自由意思ニ依リテ決定ス可キ問題ト解ス。(附錄書式第六號參照)。

刑期五日內ナル時ハ其ノ日數ニ過グルコトヲ得ザラシメタルハ若シ常ニ正式裁判申立期間内留置ス可キモノトセバ之ヨリ短キ刑期例ヘバ一日、二日ノ拘留ノ場合ニモ四日又ハ六日間留置スルニ至リ、即チ本來ノ刑期以上ニ留置ヲ爲シ本刑執行以上ノ苦痛ヲ與ヘ不當ノ結果ヲ來スヲ以テナリ。

保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直ニ出廷シテ其ノ執行ヲ受ク可シ。出廷トハ警察官署ニ出頭スルコトヲ謂フ。此

二件以上同時ニ拘留ノ言渡ヲ爲シ共ニ留置ヲ命ジタル時ハ留置期間ハ事實上ノ期間即チ一件ノミノ留置期間ヲノミ拘留ノ期間ニ通算ス可キモノトス。如何トナレバ留置期間ハ同時ニ進行スルモノナルヲ以テナリ(和歌山監獄典獄問及明治三六、九、五、
民刑甲第一九九號民刑局長回答)。

正式裁判申立ニ依リ即決處分ハ消滅スルガ故ニ保證金ハ之ヲ被告人ニ返還ス可キモノトス。但シ正式裁判申立ハ或ハ不適法ニ依リテ棄却ノ判決ヲ受クルコトアルヤモ知レザルヲ以テ正式裁判申立ト同時ニ保證金ヲ還附スル必要ナク、其ノ申立ガ裁判所ニ於テ成立シタルヲ見タル後返還ス可シ。

留置ハ警察官署ニ留置スルヲ原則トスレドモ便宜監獄ニ留置ヲ囑託スルコトヲ得可シ(明治二九、二二、二、日記第七四六號岐阜裁判所檢事正)
(請訓及明治三〇、一、八、民刑甲第一號司法大臣訓令)。

第三編 餘論

論

第一章 即決處分ノ執行

第一節 總說

違警罪即決例ニハ即決處分確定シタル場合刑ノ執行ニ關スル規定ナシ。故ニ刑事訴訟法ニ於ケル刑ノ執行ニ關スル規定ヲ適用ス可キカト云フニ然ラズ。茲ニ於テカ之ニ關スル研究ヲ爲スコト實際局ニ當ル警察官ニ必要缺ク可カラザル所トス。

第二節 刑ノ執行ノ指揮

刑ノ執行ノ指揮權ハ檢事ニ屬ス(刑訴三二〇、裁構六)。故ニ拘留ハ檢事ノ指揮ニ依リ之ヲ執行シ、科料ハ其ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス。是レ一般原則トス。然レドモ是ヲ以テ直ニ即決處分ニ於ケル刑ノ

執行ノ指揮權モ亦當然檢事ニ屬スト解スル能ハズ。裁判所構成法第六條ニ「檢事ハ判決ノ適當ニ執行セラル、ヤヲ監視ス」ト規定シタルハ只一般ニ檢事ノ職務權限ヲ規定シタルニ止リ。又刑事訴訟法第三百二十條ニ於テハ「刑ノ執行ハ其ノ刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可キ旨」ヲ規定シ通常裁判所ニ於テ言渡サレタル刑ノ執行ニ付テノミ檢事ノ指揮ヲ受ク可キコトヲ規定シタルニ止リ、特別ナル行政處分タル即決言渡ニ依リテ確定シタル刑ノ執行モ亦檢事ノ指揮スル所ニ依ラサル可カラズト解スル能ハズ。

即決處分ニ依ル刑ノ執行ノ指揮權ハ即決處分ヲ爲シタル即決官ニ屬スト解ス。蓋シ特別ナル規定ナキ限りハ處分權ヲ有スル官署ハ同時ニ之ガ内容實現ノ權ヲ附與セラルト解ス可ケレバナリ。尙

即決處分ニ對スル特別處分、(即八以下)ヲ許シタル規定ヨリモ推測セラル可シ。故ニ刑ノ執行指揮權ハ警察署長、警察分署長及其ノ代理官ニ在リト解ス。(附錄書式第八號參照)。

即決言渡ニ於テ氏名詐稱等ニ依リ人違アリタルコト確定後明瞭トナリタル場合ハ之ヲ執行ス可キモノニアラズ(明治四二、一〇、秘甲第一及同年、同月、一〇、民刑甲第一九五號民刑局長回答)
(明治四二、一〇、秘甲第一及同年、同月、一〇、民刑甲第一九五號民刑局長回答)

法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ即決言渡ヲ以テ刑ヲ科シ之ガ執行ヲ終リタル場合ニ刑事訴訟法第二百九十二條ニ依リ非常上告ヲ許サズ(明治四二、八、二六、電報岡山地方裁判所檢事正問)
(合及同年、九、二、民刑甲第一一二號民刑局長回答)

第三節 刑ノ執行

第一款 拘留ノ執行

拘留ハ一時拘置監ニ拘禁スルコトアル場合ノ外常ニ拘留場(監

獄)ニ拘禁スルニ依リテ之ヲ執行スルヲ原則ト爲ス(刑一六、監獄法一第一項第三號)。故ニ即決處分ニ依リテ言渡サレタル拘留ノ執行モ亦之ヲ監獄ニ於テ執行ス可キモノトス。然レドモ監獄法第一條第三項ニ規定シテ「警察官署ニ附屬スル留置場ハ之ヲ監獄ニ代用スルコトヲ得」ト爲セルガ故ニ、被告人ヲ留置場ニ拘禁シテ拘留ノ執行ヲ爲スコトヲ得可シ。此ノ場合ニ於テハ警察官署長ハ典獄ト同一ナル職務ヲ執ル。

受刑者ニ對シテハ逮捕狀ヲ發スルコトヲ得(大正七、一〇、七、)。

第二款 科料ノ徵收及勞役場留置ノ執行

科料ハ檢事ノ命令ニ依リ裁判所ニ納付ス可キコト刑事訴訟法ノ規定スル所ナレドモ(刑訴三二〇第二項)、即決處分ノ場合ニアリテハ言渡ヲ爲シタル警察官署ニ納付ス。科料ノ徵收ハ本來現金ヲ

以テス可キモノナレドモ其ノ金額ニ相當スル收入印紙ヲ徵收スルニヨリ之ヲ爲スヲ得、通常之ニ從フ(明治三八、一二、)。此ノ場合ニハ其ノ印紙ヲ言渡書原本又ハ即決處分簿等ノ書類ニ貼附消印ス可キモノトス。

科料ヲ完納セサル者ニ對シテハ刑事訴訟法第三百二十條第三項ヲ準用シテ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用スルコトヲ得ルヤト云フニ是レ檢事ノ命令ニ依ル場合ニ限ルト解スルヲ至當ト爲ス。如何トナレバ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ノ準用ハ要スルニ民事訴訟法強制執行ノ規定ノ準用ニシテ、元來民事訴訟法ニ基キ強制執行ヲ爲シ得ル所ノ執行力ヲ有スル債務名義ト同一ノ效力ヲ有セシムルハ法律ノ規定ヲ俟ツベキモノナレバナリ。故ニ科料ノ徵收ニ當リ刑事訴訟法ニ依ル場合ト即決處分ニ依ル場合ト

ノ二者ノ間ニ差異ヲ生ジ彼我權衡ヲ失スト雖モ如何トモ爲シ難シ
(明治四一八、一三、警保甲第一四號德島縣知事請訓及同年、九、三〇、民刑局長監獄局長回答。明治四一、九、
 一、九、二六、電報熊本縣知事問合及同年、同月、三〇、民刑甲第一九〇號民刑局長監獄局長回答。明治四
 日記第五八七一號前橋地裁判所檢事正問合及同年、同月、二八、民刑甲第二一六號民刑局長回答。明治四一、一〇、一〇、
 一〇、二八、警親第五七號ノ内務省警保局長照會)。結局勞役場留置ノ外途ナシ。

勞役場留置ハ換刑處分ニシテ刑ニアラズ。金刑ニ換ヘテ勞役ヲ
 國家ニ提供セシムル處分ナリ。勞役場ハ之ヲ監獄ニ附設ス(監獄
 法八)。留置場ガ監獄ニ代用セラル、規定ヨリ勞役場留置人ヲ警察
 官署附屬ノ留置場ニ留置スルコトヲ得ト解ス。但シ此ノ場合ニ於
 テハ實際問題トシテ勞役ヲ提供セシムルコトハ不可能ナルモ妨ナ
 シト解ス。

第三款 執行ノ囑託

拘留及勞役場留置ノ執行及科料ノ徴收ハ之ヲ他ノ警察官署ニ囑
 託スルコトヲ妨ゲズ。特ニ科料ノ徴收ハ執行ノ囑託ナキ場合ニ於
 テモ言渡書送達ノ囑託アリタル場合ハ未ダ科料ノ納付ナキ時ニ限
 リ便宜徴收ヲ爲スモ妨ゲナカル可シ(附録書式第七號參照)。

第四節 假出場手續

拘留ニ處セラレタル者ハ情狀ニ因リ何時ニテモ行政官廳(司法
 大臣)ノ處分ヲ以テ假リニ出場ヲ許スコトヲ得。罰金又ハ科料ヲ
 完納スルコト能ハザルニ因リテ留置セラレタル者ニ對シテモ亦同
 様ナリ(刑三〇)。故ニ警察官署内留置場ニ留置中ノ拘留囚又ハ勞
 役場留置人ニ對シテ假出場ノ特典ニ浴セシムトスルトキハ當該
 警察官署長ハ直接司法大臣ニ對シテ假出場ノ具申ヲ爲スコトヲ得。
 此ノ具申ニ就テハ明治四十一年司法省訓令第七號假出獄及假出場
 ニ關スル取扱手續ヲ準用ス可シ。

第五節 拘留ノ執行停止手續

拘留囚ニ對シテハ特定ノ場合ニ限リ刑ノ執行停止ヲ爲シ得ルコト刑事訴訟法第三百十九條第二項ニ規定ス。故ニ拘留囚ニシテ同條ニ掲ケタル刑ノ執行停止ヲ爲ス可キ事故アルトキハ(一)心神喪失ノ状態ニ在ルトキ(二)執行ニ因リ生命ヲ保ツコト能ハザル虞アルトキ(三)受胎後七月以上ナルトキ(四)分娩後一月ヲ經過セザルトキ)刑事訴訟法第三百二十條及監獄法施行規則第十六條ノ規定ニ準ジ其ノ即決言渡ヲ爲シタル警察官署長又ハ其ノ代理官ニ於テ刑ノ執行ヲ停止スルコトヲ得。其ノ拘留囚監獄又ハ他ノ警察官署留置場ニ於テ受刑中ナルトキハ執行停止指揮書(附録書式第九號參照)ヲ其ノ監獄又ハ警察官署ニ送付ス可シ。執行停止ノ事故止ミタルトキハ直ニ殘刑ヲ執行スルコトヲ得(明治四一、一〇、二三、警保局長照會及同年一、四、民刑甲第二八一號)

號民刑局長回答。明治四二、九、一四、警保局長照會及同年同月、二五、民刑甲第一四三號民刑局長回答。

勞役場留置ハ刑ニアラザルガ故ニ前述ノ事故アリト雖モ執行停止ノ處分ヲ爲ス能ハズ(明治四一、一一、一九、警保局第七九號ノ内務省警保局長照會及同年一二、八、民刑甲第三〇一號民刑局長回答)

第二章 書類下附ノ費用

即決言渡書ノ謄本又ハ拔書下附ノ費用ハ之ヲ徴收セズ。但シ正式裁判所ノ該費用ハ徴收ス(明治一八、一二、九、司法省達丙第一〇號)

違警罪即決例詳解(終)

附 録

違警罪即決例

明治十八年九月二十四日
太政官布告第三十一號

- 第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ 但私訴ハ此限ニ在ラス
- 第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ
又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得
- 第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得 但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコト

ヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所、犯罪ノ場所、年月日時、罪名、刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署、年月日、警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ 但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ

即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトシ

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出ササル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス 但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シ

逕警罪即決例詳解

テ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

第一號ノ一 (告發書樣式)

告發書

被告 人 住 所 身 分 職 業 氏 名 生 年 月 日	犯 罪 年 月 日 時 場 所 及 其 ノ 事 實 證 憑	法 令 適 條	右 告 發 候 也 大 正 年 月 日 警 視 廳 警 視 (警 部) 何 某 殿
---	---	------------------	--

何警察署長

何警察署勤務

巡査 氏 名 〇

附錄書式

違警罪即決例詳解

第三號ノ二 (言渡書正本様式)

科第	號	言渡書正本
住所	府(縣)	(職業)
(身分)		(氏名)
右大正	年	月
日	午	時
ニ於テ		
ニ依リ	科料	圓
	錢	ニ處ス
本刑確定後十日内ニ完納セルトキハ	刑法第十八條第二項ニ依リ	日間勞
役場ニ留置ス		
此言渡ニ付正式裁判ヲ請求スルコトヲ得ルハ	後	日内トス
大正	年	月
日		
署		
印		
何警察署長		
警視廳警視(警部)		
氏		
名		
官印		

第四號 (送達書様式)

送達書	一月	日	即決言渡書	壹通
右	達スヘキモノ也			ニ送
大正	年	月	日	
何警察署				署印
取扱者	何警察署勤務			
職氏名	巡查			氏名
印				
送達日時	月	日	時	
送達ノ場				
受取人				
送達シ能ハサル理由				
送達受託署				

附録書式

違警罪即決例詳解

第五號 (留置命令書樣式)

留置命令

(族籍) 縣府

(氏名)

右科料金 圓錢ヲ假納セサルニ付違警罪即例第九條ニ依リ 日間
留置スルモノ也

大正 年 署印 月 日

何警察署長

警視廳警視(警部) 氏名 官印

第六號 (留置命令書樣式)

留置命令

(族籍) 縣府

(氏名)

右拘留 日ニ處シ刑期相當ノ保證金 圓ヲ差出サ、ルニ付違警罪即決例第十條ニ依リ 日間
留置スル者也

大正 年 署印 月 日

何警察署長

警視廳警視(警部) 氏名 官印

附錄書式

違警罪即決例詳解

第七號 (執行囑託書樣式)

執 囑 託 書

住 所

(氏 名)

生

者別紙言渡書抄本ノ通確定セシモノニ候條拘留執行 料徴收
相成度此段囑託候也

大正 月 日

何

署

署印

何 警 署

御 中

第八號 (執行指揮書樣式)

行 指 揮 書

執行スヘキ刑名	確定年月日	刑起算日	通算日數	氏名	年齢
	大正 書 月 日	大正 年 月 日	日		歳 備

右ハ別紙騰本ノ通リ即決言渡確定候條執行相成度候也

大正 年 月 日

何 警 察

警視廳警視(警部)

氏

名

官印

東京監獄監獄 何某殿

附錄書式

第九號 (執行停止指揮書樣式)

逆留罪即決併詳

執行停止指揮書

刑名刑期	送致年月日	停止事實
	大正 年 月 日	
拘留囚氏名		
<p>右者刑事訴訟法第三百十九條第二項第 號ニ該當スルモノニ付刑ノ執行ヲ停止相成度候也</p> <p style="text-align: center;">何 警 察 署 長</p> <p style="text-align: center;">警 視 廳 警 視 (警 部) 氏 名</p> <p style="text-align: center;">官 職 名 何 某 殿</p> <p style="text-align: center;">[官 印]</p>		

附錄(終)

大正十年十二月廿五日印刷
大正十年十二月三十日發行

定價金八拾錢



著 者 田 邊 保 皓
 發 行 者 石 塚 彌 助
 印 刷 者 山 内 榮 之 進

東京市芝區愛宕町貳丁目拾四番地
 東京市芝區愛宕町貳丁目拾四番地

發行所

日本警察新聞社

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

電話 芝八四六〇
振替 東京八一五七

終